

三木市文化研究資料 第19集

シクノ谷峯構付城跡・高木大塚城跡

2007年3月

三木市教育委員会



シクノ谷峯構付城跡遠景



高木大塚城跡全景

序 文

三木市は、戦国時代に羽柴（豊臣）秀吉が三木城主別所長治を兵糧攻めしたことで、“三木の干殺し”と呼ばれ、全国的に有名です。秀吉は、兵糧攻めするために三木城の周囲を囲むように30余りの付城と多重土塁を築き、包囲したといわれています。今もなお、三木城をはじめとして、付城・多重土塁など遺跡が市内の各所に残っています。

一般に、三木合戦で長治が籠城した城兵の助命のために自害して三木城の歴史が途切れたように思われがちですが、江戸幕府の一国一城令によって、元和3年（1617）に廃城となるまで、長治の後秀吉の家臣が相次いで三木城主となり、関が原合戦後、姫路城主となった池田輝政の家臣が三木城主となりました。廃城となるまでに、合戦後の秀吉が出した諸役免除の制札によって三木町が復興し、廃城後の三木町は町人たちで運営していく在郷町へと性格を変えていきました。江戸時代の中頃、幕府が三木町を検地して租税を取り立てようとした時、町人の2人が秀吉の制札を根拠にして、幕府に租税免除を認めさせ、江戸時代を通じて三木町は免租の地となり、2名の町人は義民として、今日も三木市民に讃えられています。その後、幕府の御用大工である中井家が、全国の大工職人を一元化しようとしたとき、その動きを嫌った多くの大工が免租の三木町へ移住してきた。そして、大工道具などの金物の需要が増えることによって金物職人も増え、“金物のまち”へと変貌します。

このような三木の歴史の中で、三木合戦は現在の“金物のまち”的出発点となつた歴史の一つで、現在さらには未来の三木を考えていく上で重要な出来事です。現在の“金物のまち”的原点となつた三木合戦の歴史や当時の景観を未来の三木市民に残し、これら自らの生い立ちについて知ることができる素材を受け継いでいくことが現在の私たち三木市民の責務と思っています。

このような問題意識において、シクノ谷峯構付城跡・高木大塚城跡の調査が実施されました。本書の刊行が、私たち三木の歴史文化の再評価となり、さらには私たち三木市民が郷土を今まで以上に愛せるようになることを祈ります。

最後に、調査及び本書の作成に格段のご指導とご協力をいただきました関係機関、関係者各位の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月

三市教育長 井本 智勢子

図版目次

卷首図版 1 シクノ谷峯構付城跡遠景 高木大塚城跡全景	図版11 高木大塚城跡 4トレンチ 4トレンチ堀 5トレンチ
写真図版	図版12 高木大塚城跡 5トレンチ 6トレンチ 6-a・b・cトレンチ
図版 1 シクノ谷峯構付城跡遠景 高木大塚城跡全景	図版13 高木大塚城跡 6-aトレンチ主体部 6-aトレンチ円筒埴輪出土状況 7トレンチ
図版 2 シクノ谷峯構付城跡 1トレンチ土塁内側 1トレンチ土塁外側 2-aトレンチ堀	図版14 高木大塚城跡 8トレンチ周溝 8トレンチ柱穴検出状況 8トレンチ土塁裾
図版 3 シクノ谷峯構付城跡 2-aトレンチ土塁出土状況 2-bトレンチ 3-aトレンチ	図版15 高木大塚城跡 8トレンチ石臼出土状況 9トレンチ全景 9トレンチ周溝
図版 4 シクノ谷峯構付城跡 3-aトレンチ堀 3-aトレンチ帶郭 4トレンチ	図版16 高木大塚城跡 9トレンチ埴丘裾 10-aトレンチ全景 10-aトレンチ全景
図版 5 シクノ谷峯構付城跡 5トレンチ全景 5トレンチ西断面 5トレンチ西側柱穴	図版17 高木大塚城跡 10-aトレンチ埴丘部分 10-aトレンチ埴丘根 10-bトレンチ全景
図版 6 シクノ谷峯構付城跡 5トレンチ東側柱穴 6トレンチ全景 6トレンチ帶郭	図版18 高木大塚城跡 10-bトレンチ埴丘・土塁連結部 11-aトレンチ 11-bトレンチ
図版 7 シクノ谷峯構付城跡 6・7トレンチ 7トレンチ 8トレンチ	図版19 高木大塚城跡 12-aトレンチ 12-bトレンチ
図版 8 シクノ谷峯構付城跡 9トレンチ 10トレンチ 11トレンチ	図版20 シクノ谷峯構付城跡 2-aトレンチ堀出土遺物 高木大塚城跡8トレンチ出土遺物 高木大塚城跡9トレンチ出土遺物
図版 9 高木大塚城跡 1トレンチ 2トレンチ全景 2トレンチ	
図版10 高木大塚城跡 3-aトレンチ多重土塁北東側土塁裾 3-aトレンチ多重土塁南西側土塁裾 3-bトレンチ	

挿図目次

第 1 図 遺跡の位置	1
第 2 図 三木城・付城群分布図	3
第 3 図 シクノ谷峯構付城跡・高木大塚城跡の位置	4
第 4 図 シクノ谷峯構付城跡調査位置	10
第 5 図 シクノ谷峯構付城全体図	17
第 6 図 シクノ谷峯構付城跡 1 トレンチ実測図	18
第 7 図 シクノ谷峯構付城跡 2 - a ・ 2 - b トレンチ実測図	19
第 8 図 シクノ谷峯構付城跡 3 - a ・ 3 - b トレンチ実測図	20
第 9 図 シクノ谷峯構付城跡 4 ・ 5 トレンチ実測図	21
第 10 図 シクノ谷峯構付城跡 6 ・ 7 トレンチ実測図	22
第 11 図 シクノ谷峯構付城跡 8 ・ 9 トレンチ実測図	23
第 12 図 シクノ谷峯構付城跡 10 ・ 11 トレンチ実測図	24
第 13 図 シクノ谷峯構付城跡 2 - a トレンチ堀出土遺物	24
第 14 図 高木大塚城跡調査位置	26
第 15 図 高木大塚城跡全体図	33
第 16 図 高木大塚城跡 1 ・ 2 ・ 3 - a トレンチ実測図	34
第 17 図 高木大塚城跡 3 - b ・ 4 トレンチ実測図	35
第 18 図 高木大塚城跡 5 ・ 6 トレンチ実測図	36
第 19 図 高木大塚城跡 7 ・ 8 ・ 9 トレンチ実測図	37
第 20 図 高木大塚城跡 10 - a ・ 10 - b トレンチ実測図	38
第 21 図 高木大塚城跡 11 - a ・ 11 - b ・ 12 - a トレンチ実測図	39
第 22 図 高木大塚城跡 12 - b トレンチ実測図	40
第 23 図 高木大塚城跡 8 ・ 9 トレンチ出土遺物	40
第 24 図 小林八幡神社付城跡全体図	43
第 25 図 明石道峯構付城跡全体図	44

目 次

序 文

例 言

第1章 はじめに

第1節 遺跡の位置	1
第2節 調査に至る経緯	2
第3節 調査の方法と経過	4
第4節 調査の体制	5

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6

第3章 シクノ谷峯構付城跡の調査

第1節 遺跡の概要	9
第2節 調査の結果	11
第3節 小 結	14

第4章 高木大塚城跡の調査

第1節 遺跡の概要	25
第2節 調査の結果	27
第3節 小 結	31

第5章 三木城の南側に築かれた付城について

41

例　　言

1. 本書は兵庫県三木市別所町高木字大山に所在するシクノ谷峯構付城跡と兵庫県三木市別所町高木に所在する高木大塚城跡の範囲内容確認調査の報告書である。
2. 確認調査は、国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて、三市教育委員会が平成13年度と平成14年度に実施した。
3. 整理作業及び報告書作成は、国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて、三市教育委員会が平成18年度に実施した。
4. 調査に伴う遺跡と周辺の地形測量作業及び図化作業については、株式会社写測エンジニアリングに業務委託した。
5. 確認調査及び本書の編集、執筆については、小網豊がおこなった。
6. 遺物の実測は田中直美がおこない、挿図のトレースは赤松恵子・池田初美・宮脇美佳江がおこなった。
7. 本書に使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図と三木市発行の1万分の1の都市計画図である。
8. 遺物の写真撮影は小網豊がおこなった。
9. 確認調査で得た出土遺物及び図面・写真は三市教育委員会において保管している。
10. 確認調査及び整理作業にあたっては、下記の機関・諸氏にご指導、ご協力いただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）
兵庫県教育委員会文化財室・ホースランドパーク三木・村田修三・北垣聰一郎・松尾良隆・宮田逸民・山本誠・山上雅弘・森下大輔・立花聰・西田猛・宮原文隆・高橋成計

第1章 はじめに

第1節 遺跡の位置

三木市のある兵庫県は、瀬戸内海から日本海にわたって広がる県域である。シクノ谷峯構付城跡と高木大塚城跡の存在する三木市は、兵庫県の南東部に位置する内陸の都市である。平成17年10月に北東に隣接する美嚢郡吉川町と合併した。東及び南は神戸市、南西は加古郡稲美町、西は加古川市、北西は小野市、北は加東市、北東は三田市と境を接している。近世以前の旧分国では、播磨国の美嚢郡に属する。



第1図 遺跡の位置

第2節 調査に至る経緯

1.シクノ谷峯構付城跡

シクノ谷峯構付城跡は、平成8年度ホースランドパーク建設時に新たに発見された城跡である。江戸時代の天保12年(1841)に作成された『播州三木城地図』により、位置関係や絵図に描かれている形状が酷似していたので、シクノ谷峯構付城と比定した。

絵図に載っている城名を遺跡名としたが、“シクノ谷”はおそらく宿ノ谷の地元なまりと思われる。

当初、ホースランドパークにアクセスする市道が付城跡の中央を横断する計画であったが、事業者の理解と協力によって、付城の東側斜面へ路線変更し、現状保存されることになった。

路線変更に伴って、付城跡の東側の緩斜面について確認調査を実施した。調査は、市道予定地内に幅1mのトレンチを設定して、遺跡の範囲及び遺構の有無の確認に努めたが、遺構の検出、遺物の出土ともになかった。

平成13年度、重要遺跡の範囲内容確認を目的に調査を実施した。

2.高木大塚城跡

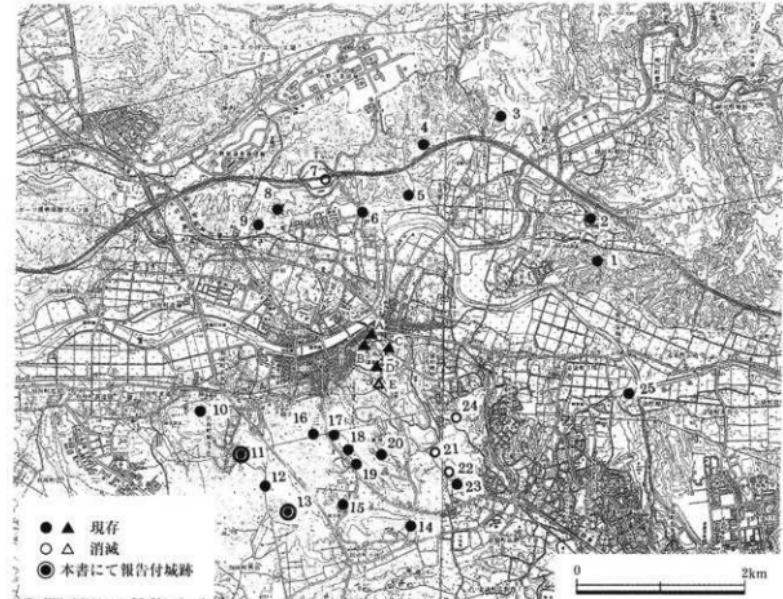
高木大塚城跡は、昭和39年に三木市文化財保護審議会によって、刊行された『三木市の古墳』には、径21mの円墳で四隅に大規模な切り込みのある方形の周溝を有する古墳として紹介されている。

付城としては、宮田逸民氏が踏査によって、現状地形の地表面観察した縄張り図を作成され、先述した『播州三木城地図』の位置関係や形状を照合して比定された。

絵図には、“大塚城”と城名が記載されているが、平成9～11年度に実施した市内遺跡詳細分布調査の際に、三木城下の湯ノ山街道沿いにある大塚町と混同されるのを避けるために遺跡名を高木大塚城とした。

当地は、ホースランドパークの敷地内に属し、平成8年度計画の際、事業者の理解と協力によって、緑地帯として現状保存されることになった。

平成14年度、重要遺跡の範囲内容確認を目的に調査を実施した。



1. 平井山ノ上付城跡	9. 平田村付城跡	17. 八幡谷ノ上明石道付城跡A	三木城
2. 平井村中村間ノ山付城跡	10. 這田村法界寺山ノ上付城跡	18. 八幡谷ノ上明石道付城跡B	A. 三木城本丸
3. 久留美村山上付城跡	11. 高木大塚城跡	19. 八幡谷ノ上明石道付城跡C	B. 三木城南構
4. 慈眼寺山城跡	12. 高木大山付城跡	20. 三谷ノ上付城跡	C. 三木城新城
5. 久留美村大家内谷上付城跡	13. シクノ谷峯構付城跡	21. 二位谷奥付城跡A	D. 三木城鷹尾山城
6. 諸部村山ノ下付城跡	14. 小林八幡神社付城跡	22. 二位谷奥付城跡B	E. 宮ノ上要害
7. 加佐山城跡	15. 明石道峯構付城跡	23. 二位谷奥付城跡C	
8. 平田村山ノ上付城跡	16. 羽場山上付城跡	24. 君ヶ峰城跡	
		25. 和田村四合谷村ノ口付城跡	

付城の位置・名称は「三木市遺跡分布地図」（三木市内遺跡詳細分布調査報告書）に掲げる。

第2図 三木城・付城群分布図

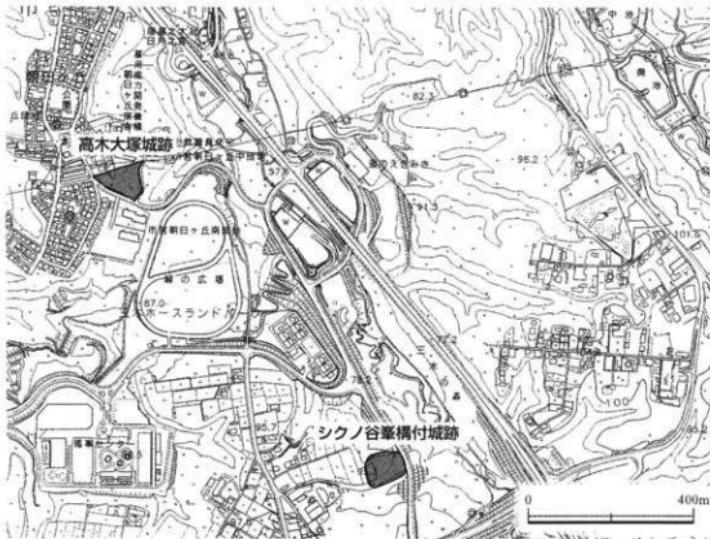
第3節 調査の方法と経過

1. シクノ谷峯構付城跡

シクノ谷峯構付城跡の確認調査は、平成13年度に実施した。調査期間は、途中、圃場整備事業や一般開発に伴う確認調査で中断したため、1次調査を平成13年7月から9月まで実施し、2次調査を平成14年2月から3月まで実施した。

調査は、付城跡の各郭の縁辺部を中心に、主に付城の範囲確認を重点に幅1m及び0.5mのトレチを11ヶ所設定し、人力掘削により遺構面の検出を行い、層位の観察、遺構の有無及び範囲の確認に努めた。各トレチで検出した遺構については1/20の平面図を作成し、片側の壁面については1/20の断面図を作成した。調査面積は約60m²を測る。なお、付城跡の現況の地形測量図及びトレチ位置図(1/200)は、株式会社エンジニアリングに委託し、トータルステーションによる測量を行った。

平成13年度、重要遺跡の範囲内容確認を目的に調査を実施した。



第3図 シクノ谷峯構付城跡・高木大塚城跡の位置

2.高木大塚城跡

高木大塚城跡の確認調査は、平成14年度に実施した。調査期間は、途中、圃場整備事業に伴う調査で中断したため、1次調査を平成14年9月から10月まで実施し、2次調査を平成14年3月に実施した。

調査は、付城跡の内部及び縁辺部を中心にトレンチを設定して範囲確認を重点に実施し、周辺の多重土塁や古墳については主に所在確認を重点に実施した。

幅1m及び0.5mのトレンチを16ヶ所設定し、人力掘削により遺構面の検出を行い、層位の観察、遺構の有無及び範囲の確認に努めた。各トレンチで検出した遺構については1/20の平面図を作成し、片側の壁面については1/20の断面図を作成した。調査面積は約130m²を測る。なお、付城跡の現況の地形測量図及びトレンチ位置図(1/200)は株式会社エジニアリングに委託し、トータルステーションによる測量を行った。

第4節 調査の体制

平成13・14年度の体制は以下のとおりである。

事務局	三木市教育長	藤原 一彦
	教育次長	小山高良(平成13年度)
		小山久男(平成14年度)
	社会教育課長	藤田 剛
調査担当	社会教育課課長補佐兼文化芸術係長	松村 正和
	文化芸術係主事	小網 豊

平成18年度の体制は以下のとおりである。

事務局	三木市教育長	井本智勢子
	教育次長(総務担当)	小西 利隆
	〃(指導担当)	米村 隆
	文化スポーツ振興課長	穂積 良夫
	副課長	松村 正和
	文化芸術係長	畠中 剛
	文化芸術係主任	小網 豊

なお、現地調査、整理作業及び遺物の実測・遺構図面の整理・トレースなどの一連の報告書刊行作業を通じて以下の方々が、現場補助員・室内作業員として参加した。

赤松恵子・池田初美・奥野文子・宮脇美佳江・大村喬・田中直美

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

三木市の地形は、市域の大部分を丘陵・台地・平野で占め、わずかな山地とからなる。市の東部は帝釈山地さらには六甲山地へと続き、市の西部は丘陵や台地が広がる。これらの山地や丘陵に水源を発した美嚢川や支流である志染川・小川川・淡河川などの美嚢川水系は西流し、別所町正法寺付近で加古川に合流する。加古川は瀬戸内海に注ぎ、古くから河川交通が盛んであった。市域はこれらの河川によって形成された沖積平野及び河岸段丘からなる。

丘陵と台地は、市北東部の美嚢川より北の小野丘陵、美嚢川と小川川に挟まれた吉川丘陵、小川川と志染川に挟まれた細川丘陵、志染川の南に展開する志染丘陵、志染川上流の帝釈山地、市西部の美嚢川南岸より明石市・加古郡稻美町へ広がる東播台地の6つの地域に分けられる。これらの丘陵や台地、河川の浸食作用によって形成された開析谷を縫うように有馬道・明石道・兵庫道・姫路道などの陸上交通が発達してきた。

今回、調査を実施したシクノ谷峯構付城跡及び高木大塚城跡は、この東播台地を構成する大阪層群の高位段丘の上に築かれている。

第2節 歴史的環境

三木市において、最も古く人間の行動が確認できるのは旧石器時代である。美嚢川を望む段丘上の別所町和田の白長大神神社散布地、与呂木宮ノ元遺跡で後期旧石器が出土している。続く縄文時代は、志染町の窟屋1号墳下層や戸田遺跡で土坑を検出し、その中から後期の土器が出土している。周辺の段丘上に旧石器及び縄文時代の遺跡が存在するものと思われる。

弥生時代は、市西部の美嚢川の北側丘陵で、年ノ神遺跡や和田神社遺跡などの中期から後期にかけての集落が確認されている。また、美嚢川と志染川が合流する東側段丘や志染川南側段丘でも、与呂木宮ノ元遺跡や与呂木大畠遺跡、宿原岡ノ下遺跡、小戸田遺跡などの中期から後期の集落が確認されている。

古墳時代になると、台地や斜面地、段丘の至るところに中期から後期にかけて数多くの古墳が築かれるようになる。美嚢川と加古川の合流地点、市西部の美嚢川に臨む南側及び北側丘陵、志染川の南側丘陵に集中している。全長91mの前方後円墳である愛宕山古墳（三木市指定文化財）や年ノ神6号墳からは三角板革綴短甲、窟屋1号墳では金銅装单鳳環頭太刀柄頭が出土しており、中央との繋がりが注目されている。集落は、西ヶ原遺跡とその西側段丘で久留美田井野遺跡が確認されている。

奈良時代以降、三木の特色となる窯業生産が始まる。最盛期は12世紀の平安時代後期から鎌倉時代初期で、尊勝寺や鳥羽離宮などの院に關係する寺院や邸宅に瓦を供給していたことが確認されている。窯跡は、跡部・久留美・平井・与呂木・宿原に分布している。

南北朝時代には、古代からの名刹の伝承をもつ高男寺廃寺遺跡より、「貞和二季」(1346)銘の入った瓦が出土している。また、三木合戦時の付城跡と考えられていた和田村四合谷村ノ口付城跡から嘉暦二年(1327)銘の入った硯をはじめ、南北朝期の遺物が数多く出土していることから、暦応二年(1327)に南朝方の丹生山城を北朝方の赤松氏が攻めるために集結した「志染軍陣」の可能性が指摘されている。

室町時代になると播磨の守護を赤松氏が務めている。赤松満祐によって6代将軍足利義教が殺害された嘉吉の乱により、山名氏にその座を奪われた。応仁の乱の後、赤松氏は播磨の守護に復帰するが、やがて赤松氏に代わって実権を握っていくのは有力被官であった。その中の別所氏は、東播磨で勢力をもち、則治が15世紀末に三木を本拠地とし、三木城を築城したといわれている。三木城は、本丸・南構・新城・鷹ノ尾城・宮ノ上ノ要害からなる。本丸では二分する堀を確認し、南構からは備前焼大甕群や建物跡、堀などの遺構を確認している。

天下統一を目指す織田信長は、毛利氏を攻める足掛かりとして天正5年(1577)に播磨攻めを家臣の羽柴秀吉に命じた。当初、別所氏の当主長治は織田方に味方していたが、天正6年(1578)に突然毛利氏に寝返った。織田方は三木城を攻略するために三木城の周囲に付城群を築いて包囲し、兵糧攻めをおこなった。付城は毛利氏からの兵糧搬入を阻止するために、状況に応じて増やされ、30余りの付城が築かれたといわれている。やがて、三木城内の兵糧が尽き、天正8年(1580)1月、城主長治が領民の助命のため、自刃して開城した。

その後、織田・豊臣の支配下となり、秀吉の家臣が相次いで城主となり、関が原合戦後は、姫路城主池田氏の家臣が城主となって三木城は存続したが、江戸幕府による一国一城令の政策に伴って、元和3年(1617)に廃城となった。以後、城下の三木町は在郷町と性格を変え、中期以降多くの大工職人が三木町に移住し、大工道具の需要が増えたことで金物職人も増加していき、金物の町として繁栄し現在に至っている。

(参考文献)

- 『三木市史』三木市1970年
『三木市遺跡分布地図』三木市教育委員会2001年
『年ノ神遺跡』兵庫県教育委員会2002年
『和田神社遺跡』兵庫県教育委員会2002年
『与呂木遺跡』兵庫県教育委員会1994年
『年ノ神古墳群』兵庫県教育委員会2002年
「窟屋1号墳」「ひょうごの遺跡」42号2002年
『西ヶ原遺跡』兵庫県教育委員会1996年
『田井野遺跡』兵庫県教育委員会1996年
『久留美・跡部窯跡群』兵庫県教育委員会1999年
『三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』「三木市教育委員会2000年
「和田村四合谷村ノ口付城跡」「ひょうごの遺跡」50号2004年

第3章 シクノ谷峯構付城跡の調査

第1節 遺跡の概要

1.立 地

シクノ谷峯構付城跡は三木市の南西部、標高96mの台地にある。美義川の左岸にあり、平野部との比高差は約50mで、三木城からは直線距離で南南西へ約2kmのところに位置する。

城は美義川に向かって北西へ延びる尾根上で、東側にある比高差約30mの宿ノ谷と呼ばれる開析谷に突き出した尾根の先端に位置する。北側及び南側には宿ノ谷から派生した比高差約10mの谷がある。

付城跡の西側約250mのところに通称いちご(一合)坂と呼ばれる神戸市西区神出町老ノ口を経由して魚住に至る山道があり、古くから利用されていた。

2.構 造

付城は、尾根上に四方を土塁で囲まれた主郭、主郭東側の平坦な郭、主郭南側の腰郭状の帯郭から構成される。

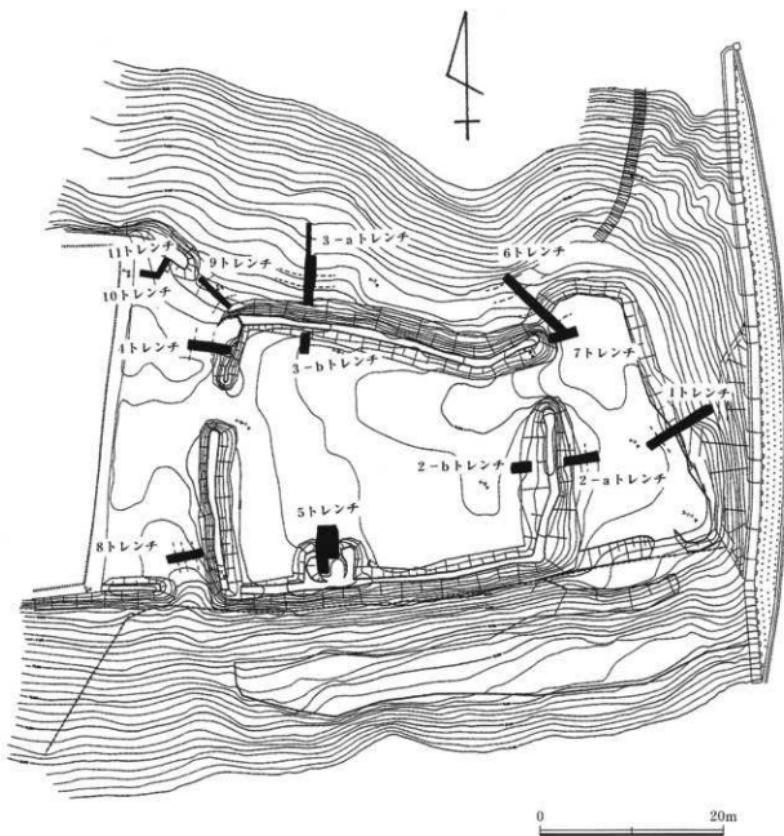
主郭は内法高1.0~1.3mの土塁で囲まれ、南側に20m²の櫓台と考えられる施設がある。また、東側と西側に幅3.5mの虎口を設けている。主郭の東側の郭は、南側に幅約2mの虎口を設け、南側の帯郭へスロープ状に下っている。東郭と呼称する。南側の帯郭は、主郭との比高差が3mで、最大幅6m、長さ約55mである。

さらに調査では、主郭の西側が内法高0.5~0.6mの鎌状の土塁で囲まれていることが分かり、西郭と呼称する。付城の規模は、南北46m、東西70mの総面積約3,200m²である。

3.付城からの眺望

付城跡からの眺望は、宿ノ谷に沿って北方向にわずかに開けており、美義川やその北側の丘陵がわずかに見ることができる。三木城は東側の丘陵に阻まれ、見ることはできない。谷を挟んで東側の明石道峯構付城跡を見ることはできる。

北西に連なる高木大塚城跡、法界寺山ノ上付城跡及び丘陵南側については、高さ3mの櫓を設ければ望むことができるものと思われる。



第4図 シクノ谷峯構付城跡調査位置

第2節 調査の結果

1 トレンチ

東郭の東法面に幅1m、長さ8mのトレンチを設定した。郭の縁辺部で土壘を確認した。土壘の規模は、残存高が内部で約0.4m、外部で約1.2m、上部の幅は約1.5m、基底部幅は約4mである。土壘の外側の地山を0.3mほど削り込んで、外部の比高差を約1.5mとして、土壘を高く見せている。

土壘の積土は、山土と地山の土を積んだものと思われる。積土には礫が多く混じっているが、上部は細かい石が多く、基底部に近づくほど粗く大きな礫が混じる。主郭の土壘（4トレンチ）と比較すると積み方が粗放である。

2-a トレンチ

主郭の東側土壘の外法から東郭の平坦面にかけて1トレンチのはば延長上に幅1m、長さ4mのトレンチを設定した。土壘裾で、幅約2.1m、深さ約0.8mの断面形がV字形の堀を検出した。堀の東側の方には、約0.3mの地山の高まりを残している。堀底から土壘頂部までの比高差は約2.5mを測る。堀は土壘に沿って東側の虎口まで約20m続いているものと思われる。

遺物（第13図）は土堀1点のみ出土した。口径39cmで、残存3.8cmで、口縁部は玉縁状に肥厚し、端部上端はヘラ成形である。外面端部の3cm下から煤が付着している。胎土はやや粗く、砂と焼土が多く混じる。右回転のロクロ成形である。

2-b トレンチ

主郭の東側土壘の内法で1トレンチ及び2-aトレンチの延長上に幅1m、長さ2mのトレンチを設定した。土壘の内側裾を検出した。東側土壘の規模は、残存高が内部で約1m、外部で約1.6m、上部の幅は約1m、基底部幅は約5.6mである。

3-a トレンチ

主郭の北側土壘の外法から北側斜面にかけて、幅1m、長さ6mトレンチを設定し、さらに幅0.5m、長さ3m延長した。土壘裾で、幅約2m、深さ約0.7mの断面形がV字形の堀を検出した。堀底から土壘頂部までの比高差は2.7mを測る。堀に沿って幅約1.2mのテラス状の遺構を検出した。地山を削って構築したものと思われる。

3 - b トレンチ

主郭の北側土壘の内法で3-a トレンチの延長上に幅1m、長さ2mのトレンチを設定した。土壘の内側裾を検出した。北側土壘の規模は、残存高が内部で約1.4m、外部で約2m、上部の幅が約1m、基底部幅が約4.6mである。

4 トレンチ

主郭の西側土壘の外法面から西郭の平坦面にかけて幅1m、長さ5mのトレンチを設定した。西側の虎口の北側で後世に土取りされた部分を利用して設定した。土壘の積土はほぼ40cmごとに3段階に版築された状況が観察できた。西側土壘の規模は、残存高が外部で約1.5m、基底部幅は約3mである。

土壘裾で幅約2.4m、深さ約0.9mの断面形がV字形の堀を検出した。堀底から土壘頂部までの比高差は2.4mを測る。

5 トレンチ

主郭の南側の櫓台と思われる平坦部分に長さ5m、幅は法面部分が2mで、中央部分が1mのトレンチを設定した。櫓台の端部で幅約0.6m、内法高約0.2m、外法高約0.5mの土壘状の土盛りを検出した。この土盛りは櫓台の東・南・西の3方向を囲んでいるようである。

また、櫓台の裾より北へ約0.7mのところで径約34cmの柱穴、この柱穴から東へ約0.5mのところで径約20cmの柱穴を検出した。主郭内に掘立柱建物が存在した可能性が考えられる。

6 トレンチ

東郭の北側法面に幅1m、長さ5.7mのトレンチを設定した。土壘裾で幅約2.6m深さ0.5mの堀を検出した。堀に沿って幅約1.6mのテラス状の遺構を検出した。3-a トレンチで検出した堀及びテラス状遺構に繋がるものと思われる。検出したテラス状遺構は、3-a トレンチで検出したテラスとは異なり、盛土により構築されているものと思われる。

7 トレンチ

主郭の北側土壘の東先端で、東側虎口の北側に幅1m、長さ3mのトレンチを設定した。主郭の土壘を築いてから、先端部分を利用して東郭の土壘を築いているのを土層で観察できた。土壘の規模を確認するために、6 トレンチ

方向に幅1m、長さ5.3m延長した。土壘の規模は、残存高が内部で約0.4m、外部で約1.2m、上場の幅約1.2m、基底部幅約4.3mである。1トレンチで検出した土壘に繋がっており、東郭は低い土壘で囲まれているものと思われる。

8 トレンチ

主郭の西側土壘の西側に幅1m、長さ4mのトレンチを設定した。土壘裾で幅約1.7m、深さ約0.7mの断面形がV字形の堀を検出した。主郭の虎口部分にあると思われる土橋で分断されていることが考えられるが、4トレンチで検出した堀と一連のものと思われる。主郭の西側土壘と西方向へ伸びる土壘の間に堀が続いていると思われることから、南方向へ開口する部分は虎口ではない。

9 トレンチ

主郭土壘の北西隅に幅0.5m、長さ4.5mのトレンチを設定した。幅約3m、深さ約0.7mの堀を検出した。堀底では、西側から北側へ傾斜が認められる。堀の北西の方が土壘裾に接しているため、8トレンチ同様、北方向に開口する虎口ではない。

10・11トレンチ

10トレンチは、付城の西側に隣接した水田の畦畔の東法面に幅0.5m、長さ2.2mのトレンチを設定した。土壘の裾と思われる遺構を検出した。畦畔は、土壘を利用して形成されたものと思われる。

11トレンチは、付城の北西の壇状遺構に垂直に幅0.5m、長さ2.5mのトレンチを設定した。土壘の裾と思われる遺構を検出した。土壘の規模は、残存高内部で約0.5m、外部で約0.6m、上場幅約1m、基底部幅約4.5mである。この検出状況から、付城の西側に鏡状の土壘が存在した可能性が考えられ、主郭の西側にも郭が形成されていたことが指摘できる。

第3節 小 結

各トレンチで確認された遺構や地形測量による表面観察から、付城跡の概要を述べていきたい。

主 郭

主郭は、四方を土塁、東・北・西の三方を土塁に沿った堀によって囲まれ、東及び西に虎口を設けている。また、南側に櫓台を設け、郭内部は平坦ではあるが、西から東方向へ若干の自然傾斜が認められる。

規模は、土塁の外側で北辺が34m、南辺が40m、東辺が26m、西辺が32mあり、土塁で囲まれた内部の空間は、北辺が28m、南辺が31m、東辺が19m、西辺が27mあり、面積は690m²である。

土 塁 主郭の四方を土塁が囲んでいる。上場の幅は1m、基底部幅は傾斜の急な東・北・南側では5~6m、傾斜の緩やかな西側では3mである。残存高については、外部では1.5~2mで谷に面した北及び南側外部の傾斜は急になっている。内部では0.5~1.4mで北及び東側が急な傾斜になっており、西及び南側が緩やかな傾斜になっている。付城の北側に10mほど緩斜面が続くため、北側土塁が一番堅固に築かれている。また、東虎口の5m手前より、約40度北側に外反している。

堀 東・北・西の三方で土塁に沿って検出した。東側の堀は、幅2.1m、深さ0.8mで断面形がV字形で東側の虎口の手前まで築かれているものと思われる。北側の堀は、幅2m、深さ0.7mで断面形がV字形で東郭の北縁に及んでいるものと思われる。西側の堀は、西側の虎口より北側では幅2.4m、深さ0.9mで北側の堀と繋がっており、北側へ若干の傾斜が認められる。虎口より南側では幅1.7m、深さ0.7mで、南斜面に堅堀となって続いているものと思われる。虎口部分は土橋状の遺構で遮断されているものと思われる。

櫓 台 南側土塁の南西隅より東へ5mのところに東西5m、南北4mで20m²の面積の平坦地を築いている。主郭との比高差は約0.5mで、南側土塁とはほぼ同じレベルである。平坦面には、高さ0.2mの土塁状の遺構で囲まれているのを検出した。おそらく、土台が土壁の櫓の残ると考えている。

虎口 東と西にそれぞれ設けている。東虎口、西虎口ともに幅3mで直線上に設けている。

東郭

東郭は北及び東を主郭より低い土壘で囲まれ、南の帶郭に連絡する虎口を設けている。

規模は、土壘の外側で北辺が12m、南辺が16m、東辺が30m、西辺が35mあり、土壘で囲まれた内部の空間は、北辺が5m、南辺が10m、東辺が23m、西辺が23mあり、面積は170m²である。

土壘 北及び東で検出している。南側は調査区外で確認はできなかつたが、おそらく土壘を築いているものと思われる。上場の幅は1m、基底部の幅は4m、残存高は内部で0.4m、外部で1.2mである。

堀 郭の南側に南東方向に開口している。幅は2mである。南側の帶郭にスロープ状に下っているものと思われる。

西郭

西郭は北・西・南を鎌状の土壘で囲まれている。北及び南側の虎口状の空間は、いずれも堀で塞がれており、虎口にならない。

規模は、土壘の外側で北辺が10m、南辺が10m、東辺が38m、西辺が40mあり、土壘で囲まれた内部の空間は、北辺が5m、南辺が8m、東辺が32m、西辺が34mあり、面積は260m²である。

土壘 北・西・南を鎌状の土壘が囲んでおり、土壘北側及び南側の上場の幅は1m、基底部幅4m、残存高は土壘内部が0.4m、外部は北側が1m、南側が1.2mである。西側は現在、水田の畔に改変されているが、内側の裾の残存が確認できたことから土壘と思われる。

北側帶郭

主郭の北側の堀に沿って検出した幅1.2~1.6mのテラス状遺構は、帶郭になるものと思われる。地山を削って築いた部分と盛土によって築いた部分がある。東郭及び西郭の主郭北側の土壘より北へ張り出した部分から横矢が掛

かる縄張りになっており、攻めてきた敵を引き寄せるための通路としての役割が考えられる。

南側帯郭

主郭の南側に築かれ、最大幅6m、長さ約55mである。主郭との比高差は3mを測る。

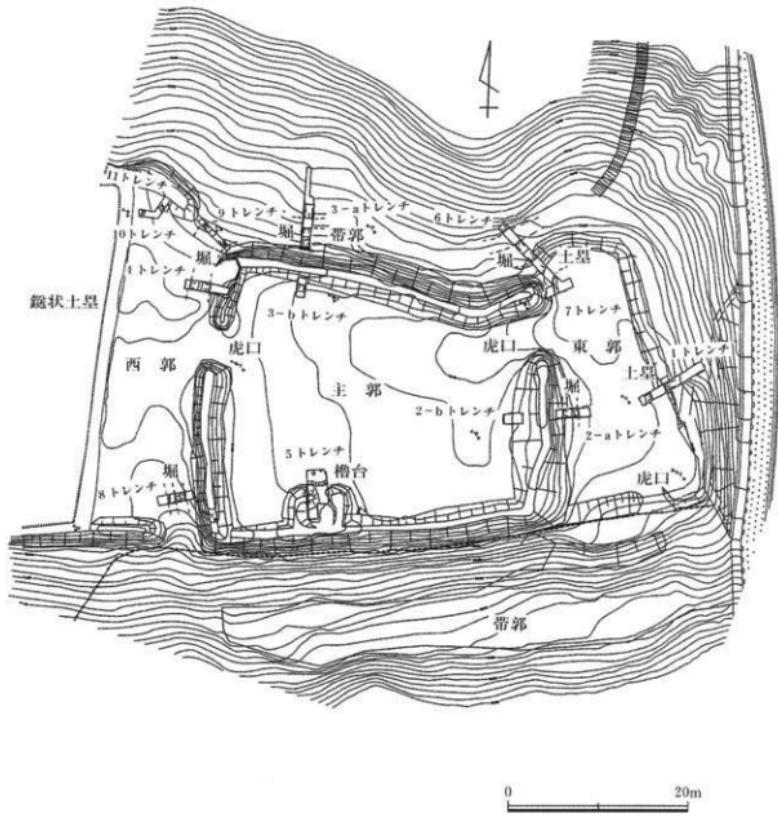
まとめ

シクノ谷峯構付城跡は確認調査の結果、土壘で囲まれた主郭、土壘で囲まれた東郭及び錐状の土壘で囲まれた西郭、北側及び南側に帯郭を配した付城であることが明らかになった。櫓台付近で柱穴を2ヶ所確認したことから掘立柱建物跡の存在が考えられ、主郭東側の堀から土塙が出土していることから、築城されてから廃城まで常時生活に使用されていたことが想像される。付城の規模は、一般的な山城に比べて小規模なので、駐屯できる兵は数十人程度と考えている。築城時期は、出土した土塙から16世紀後半と考えられ、天正6～8年（1578～80）の三木合戦時に織田方によって築かれた付城と思われる。

さらに、堅固な土壘で囲まれた主郭、尾根の先端に低い土壘で囲まれた郭と尾根の付け根部分に錐状の土壘で囲まれた郭を配したこの付城跡の構造は、同じく三木城の南側に築かれた小林八幡神社付城跡の構造と相似していることが指摘できる。

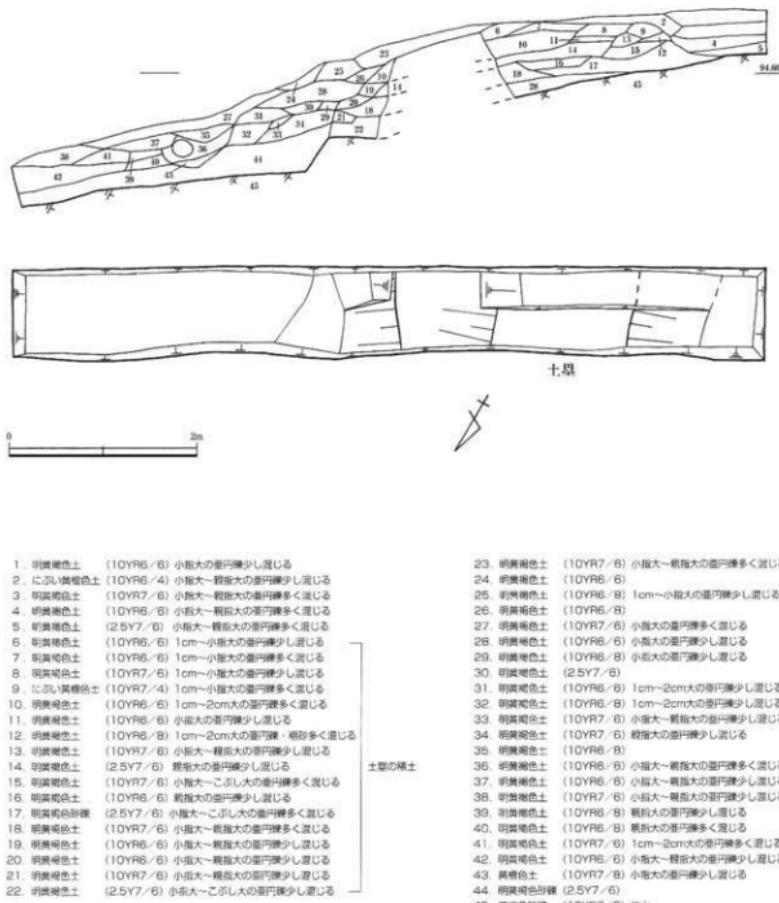
三木城の南東の丘陵上で、法界寺山ノ上付城跡より南東に伸びる多重土壘線の一角に築かれ、北西の高木大塚城跡、東の明石道峯構付城跡の眺望は良いものの、三木城跡は明石道峯構付城跡の存在する東の丘陵で遮断されて全く見ることができない。江戸時代の『播州三木城地図』（天保12年・1842成立）には明石道峯構付城跡の東側と法界寺の西側の在田寺に至る2本の明石道が描かれており、その他にも間道があったことが想像されることから、明石方面の魚住より毛利氏によって兵糧が三木城に運び込まれた輸送ルートを遮断することを目的に築かれたものと考えられる。

今回、付城北側で検出した通路状の帶郭及び調査できなかった南側の帶郭の性格や主郭内部を明らかにすることを今後の調査の課題としたい。



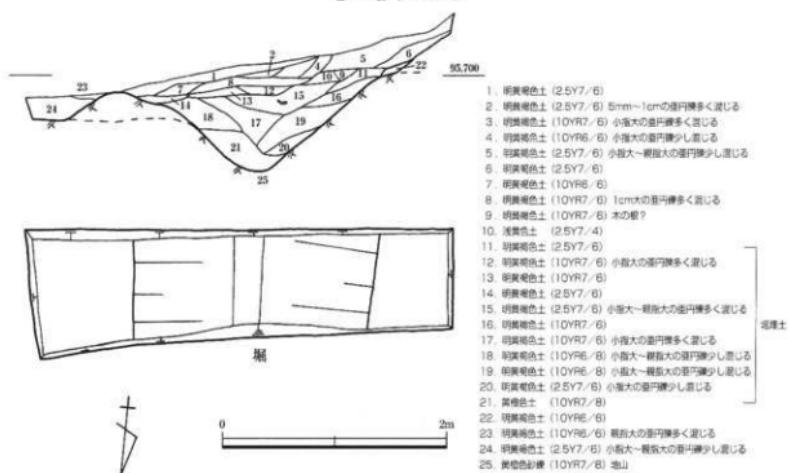
第5図 シクノ谷峯構付城全体図

1トレンチ

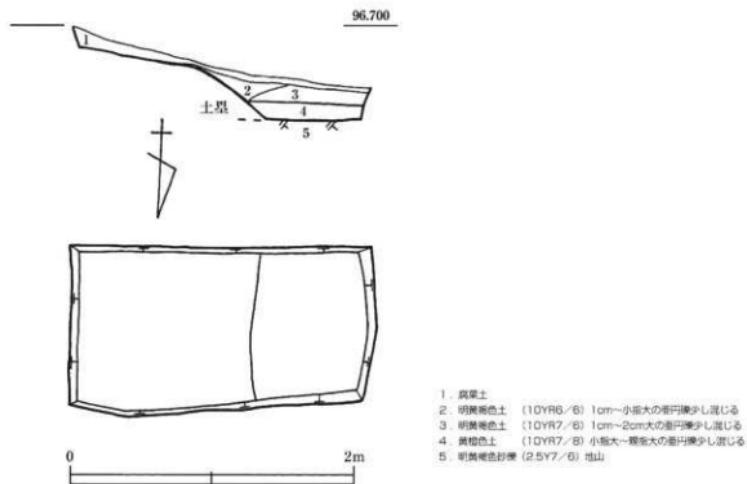


第6図 1トレンチ実測図

2-a トレンチ

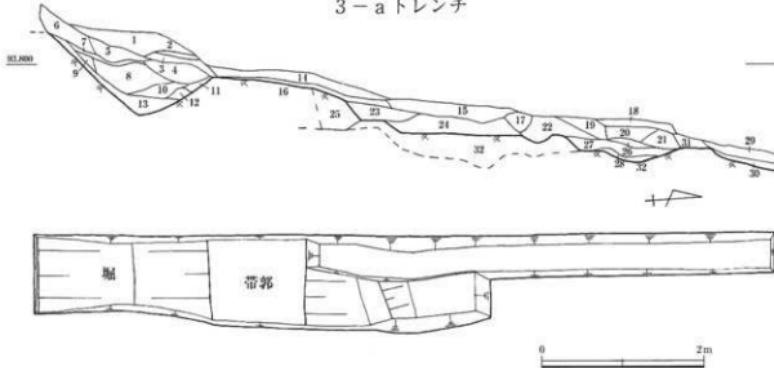


2-b トレンチ

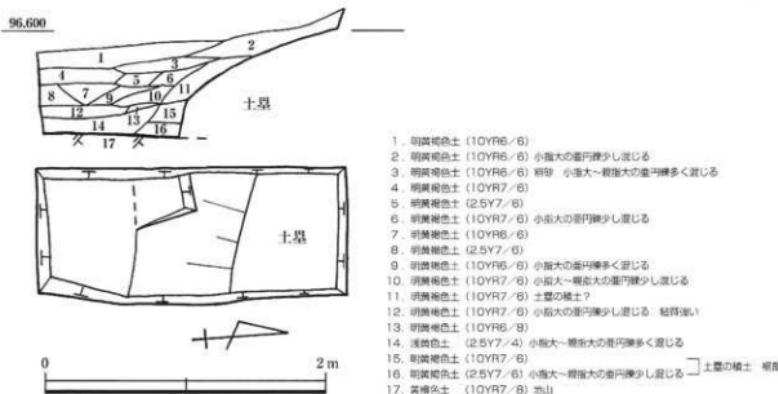


第7図 2-a・2-b トレンチ実測図

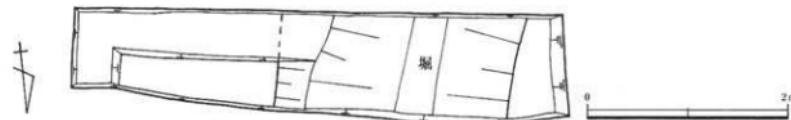
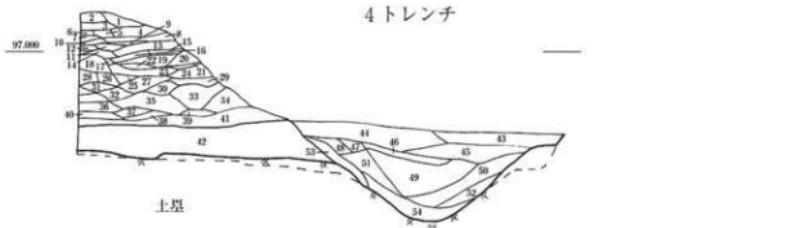
3-a トレンチ



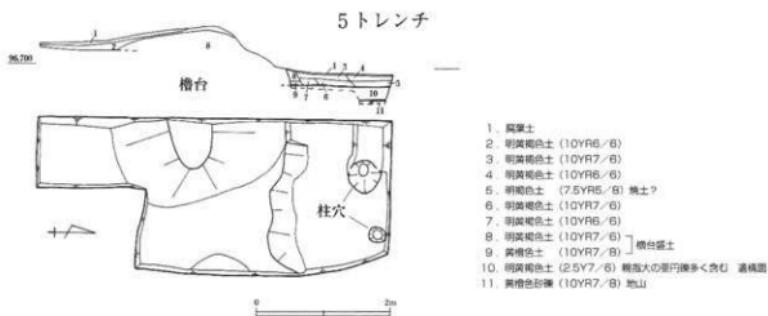
3-b トレンチ



第8図 3-a・3-b トレンチ実測図



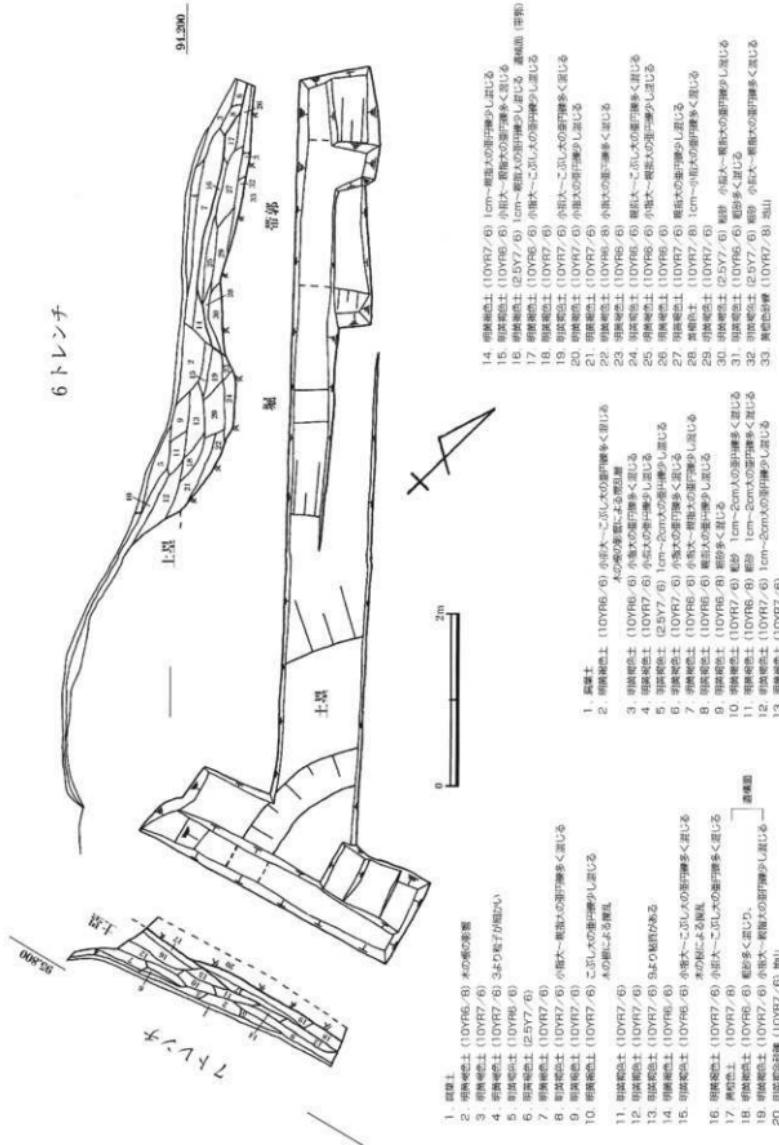
1. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
2. 明黄褐色土 (10YR7-/6) 小指大の墨円跡少し混じる
3. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
4. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
5. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
6. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
7. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
8. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6) 小指大の墨円跡多く混じる
9. 浅黄色土 (2.5Y7-/4)
10. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
11. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6) 小指大の墨円跡少し混じる
12. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
13. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
14. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
15. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
16. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
17. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
18. 浅黄色土 (2.5Y7-/4)
20. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
21. 浅黄色土 (2.5Y7-/6)
22. 浅黄色土 (2.5Y7-/6) 1cm~2cmの大墨円跡少し混じる
23. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
24. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6) 小指大の墨円跡少し混じる
25. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
26. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6) 小指大の墨円跡多く混じる
27. 浅黄色土 (2.5Y7-/4) 1cm~小指大の墨円跡少し混じる
28. 明黄褐色土 (10YR7-/6) 1cm~小指大の墨円跡少し混じる
29. 明黄褐色土 (10YR7-/6) 1cm~小指大の墨円跡少し混じる
30. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6) 1cm~小指大の墨円跡少し混じる
31. 明黄褐色土 (10YR7-/6) 1cm~2cmの大墨円跡少し混じる
32. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
33. 浅黄色土 (2.5Y7-/4)
34. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
35. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
36. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
37. 明黄褐色土 (10YR7-/6) 35より粒子細かく、粘質強
38. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
39. 明黄褐色土 (10YR7-/6) 小指大の墨円跡少し混じる
40. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
41. 浅黄色土 (2.5Y7-/4)
42. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
43. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
44. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
45. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6) 小指大~こぶし大の墨円跡多く混じる
46. 明黄褐色土 (10YR7-/6) 程指大の墨円跡少し混じる
47. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
48. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
49. 明黄褐色土 (10YR7-/6) 小指大の墨円跡少し混じる
50. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
51. 明黄褐色土 (10YR6-/8)
52. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
53. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6)
54. 浅黄色土 (2.5Y7-/4) こぶし大の墨円跡少し混じる
55. 黄褐色土 (10YR7-/8) 地山



1. 黑壤土
2. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
3. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
4. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
5. 明黄褐色土 (7.5YR5-/8) 粘土?
6. 明黄褐色土 (10YR7-/6)
7. 明黄褐色土 (10YR6-/6)
8. 明黄褐色土 (10YR7-/6) 槽台盛土
9. 黄褐色土 (10YR7-/8)
10. 明黄褐色土 (2.5Y7-/6) 程指大の墨円跡多く含む 通溝面
11. 黄褐色砂砾 (10YR7-/8) 地山

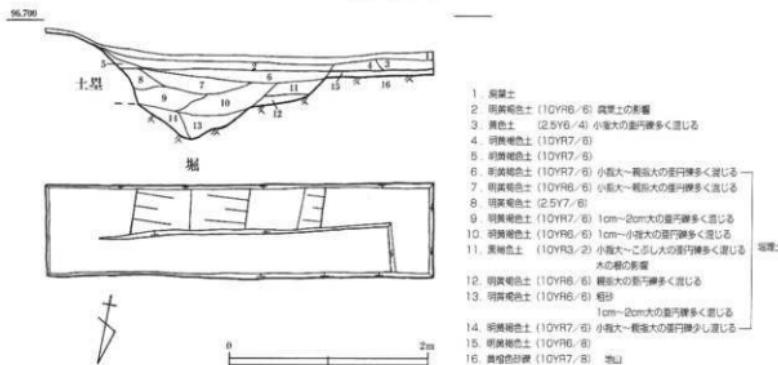
第9図 4・5トレンチ実測図

6 レンチ

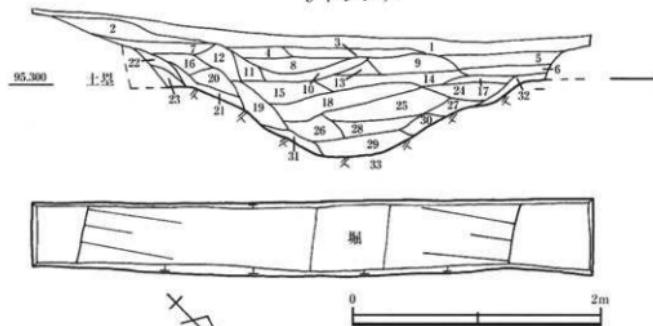


第10図 6・7 レンチ実測図

8 トレンチ

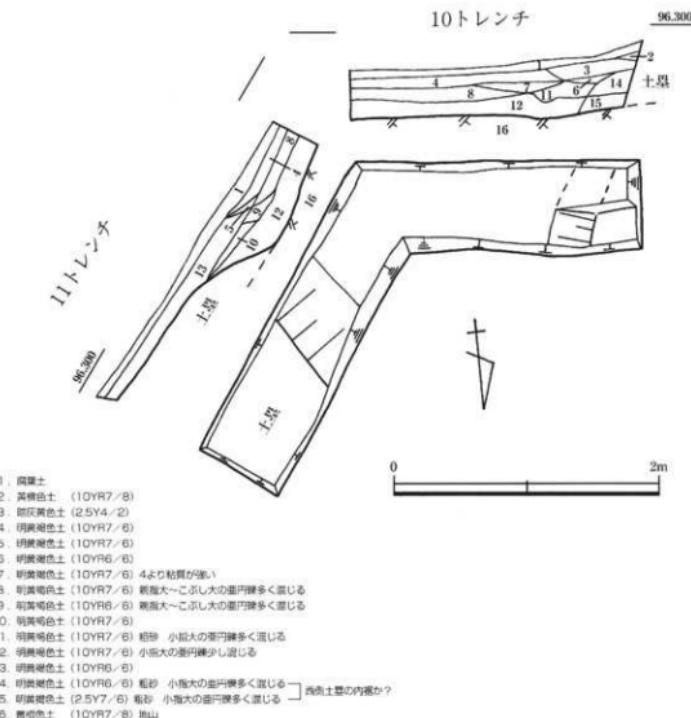


9 トレンチ

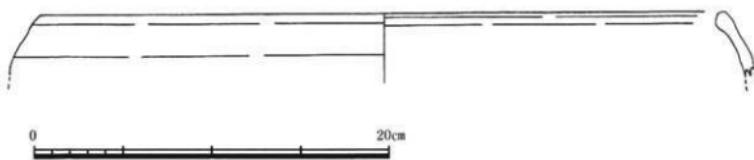


1. 細壤土
2. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粗砂多く混じる
3. 黄褐色土 (25Y6/4) 粗砂多く混じる
4. 黄褐色土 (10YR5/6) 木の根の影響
5. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粗砂 1cm～2cm粒度の砂円錐多く混じる
6. 明黄褐色土 (10YR6/6)
7. 淡黄褐色土 (25Y7/4) 粗砂多く混じる
8. 明黄褐色土 (10YR6/6) 小粒度～粗粒度の砂円錐多く混じる
9. 明黄褐色土 (10YR6/6) 小粒度の砂円錐多く混じる
10. 明黄褐色土 (10YR6/6) 1cm～粗粒度の砂円錐多く混じる
11. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粗砂 小粒度の砂円錐多く混じる
12. 明黄褐色土 (25Y7/6) 粗砂 小粒度の砂円錐多く混じる
13. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粗砂 小粒度～粗粒度の砂円錐多く混じる
14. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粗砂 小粒度の砂円錐多く混じる
15. 明黄褐色土 (10YR6/6) 小粒度～粗粒度の砂円錐多く混じる
16. 淡黄褐色土 (25Y7/4) 粗砂多く混じる
17. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粗砂多く混じる
18. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粗砂 小粒度の砂円錐多く混じる
19. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粗砂 小粒度の砂円錐多く混じる
20. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粗砂多く混じる
21. 明黄褐色土 (10YR7/6)
22. 明黄褐色土 (10YR6/6)
23. 明黄褐色土 (10YR7/6) 小粒度～粗粒度の砂円錐多く混じる
24. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粗砂大～粗粒度の砂円錐少し混じる
25. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粗砂 小粒度の砂円錐多く混じる
26. 明黄褐色土 (10YR7/6) 小粒度～ごく少しだけ砂円錐多く混じる
27. 明黄褐色土 (10YR6/6)
28. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粗砂多く混じる
29. 明黄褐色土 (10YR7/6)
30. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粗砂多く混じる
31. 明黄褐色土 (10YR7/6)
32. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粗砂多く混じる
33. 明黄褐色土 (7.5YR5/8) 地山

第11図 8・9トレンチ実測図



第12図 10・11トレンチ実測図



第13図 2-a トレンチ堀出土遺物

第4章 高木大塚城跡の調査

第1節 遺跡の概要

1.立 地

高木大塚城跡は、三木市の南西部、標高84mの台地にある。美嚢川の左岸にあり、平野部との比高差は約40mで、三木城からは直線距離で西南西へ約2kmのところに位置する。

城は美嚢川に向かって北西へ延びる尾根上に位置する。付城跡の南東には宿ノ谷から派生した比高差約5mの谷がある。

付城跡の東側約250mのところに通称いちご(一合)坂と呼ばれる神戸市西区神出町老ノ口を経由して魚住に至る山道があり、古くから利用されていた。

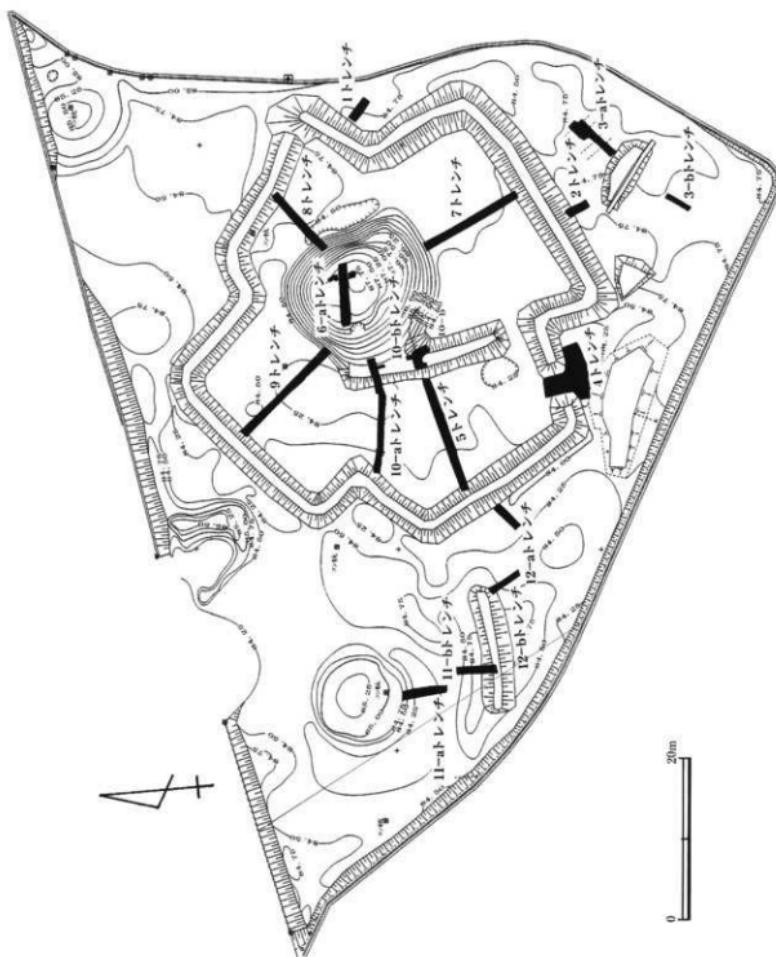
2.構 造

付城は、土壘の外郭ラインの四隅に横矢掛けのための折れを設け、平面形は十字形を呈している。南西隅に幅約1.2mの虎口を設けている。付城周辺は約50基からなる高木古墳群が存在し、外郭ラインの北東隅は、古墳を利用して築いている。中央には径20mの古墳があり、櫓台などの施設に使われたものと思われる。墳丘の西側に全長約20m、上場の幅約1m、基底部幅約4.4mの土壘を築き、郭内の仕切りとし、幅約1.6mの虎口を設けている。付城の規模は、南北52m、東西50mの総面積約2,600m²である。

3.付城からの眺望

付城跡からの眺望は、シクノ谷峯構付城跡同様、宿ノ谷に沿って北方向に開けており、美嚢川やその北側の丘陵がわずかに見ることができる。三木城は東側の丘陵に阻まれ、見ることはできない。

北西の法界寺山ノ上付城跡、南東のシクノ谷峯構付城跡については、高さ3mの櫓を設ければ望むことができるものと思われる。丘陵の南側については、シクノ谷峯構付城跡の南側の丘陵頂きまで見渡すことが可能である。



第14図 高木大塚城跡調査位置

第2節 調査の結果

1 トレンチ

外郭ラインの土壘の北東隅に幅1m、長さ3.2mのトレンチを設定した。土壘に沿って、幅約2m、深さ約0.3mの断面形が逆台形の堀を検出した。堀底から土壘の頂部までの比高差は約1.4mを測る。トレンチの北隅で高木5号墳の墳丘裾を検出し、土壘の隅は古墳の墳丘を利用して築いていることが確認できた。周溝は、堀の構築により消滅したものと思われる。

2 トレンチ

外郭ラインの南部分の土壘外側に幅1m、長さ1.8mのトレンチを設定した。土壘に沿って、幅約1.7m、深さ約0.2mの断面形が逆台形の堀を検出した。堀底から土壘の頂部までの比高差は約1.8mを測る。1トレンチで検出した堀の続きをと思われる。

3-a トレンチ

市営住宅建設に伴う調査で検出した多重土壘線の北側の続きを検出した。土壘の規模は、上場の幅約1.5m、基底部幅約3.7m、高さ0.5mである。この多重土壘は表面観察により、付城の堀の傍まで続いているものと思われる。

土壘の南西に隣接して墳丘の裾と思われる遺構を検出した。周溝は多重土壘の構築に伴って消滅したものと思われる。

3-b トレンチ

3-a トレンチの南西に幅0.5m、長さ3.3mのトレンチを設定した。墳丘の裾と思われる遺構と幅約0.4m、深さ約0.3mの周溝と思われる溝を検出した。3-a トレンチで墳丘裾と思われる遺構を検出していることから、当初、表面観察で多重土壘と考えていたが、径約11mの古墳の残欠と考えられる。古墳の積土は、付城の土壘もしくは多重土壘の積土に利用されたものと思われる。

4 トレンチ

付城の南西隅の虎口付近にトレンチを設定した。虎口の幅は約1mであることが確認できた。城内より続いていると思われる最大幅約0.8m、深さ約0.2mの溝が虎口部分を東から西に横断して虎口西側の堀に繋がっているのを検出した。城内より排水のための溝と思われる。

虎口の東側で、幅約1m、深さ約0.2mの堀を検出した。1トレンチ及び2トレンチで検出した堀に繋がる堀と思われる。堀は虎口のところで途切れしており、虎口部分は堀を掘らず土橋状に構築している。

5 トレンチ

付城内の南西に幅1m、長さ15mのトレンチを設定した。西端で外郭ラインの土壘の内側裾を検出し、東端で墳丘西側の土壘裾で幅約0.2m、深さ約0.1mの溝を検出した。城内に設けた排水溝と思われる。

6-a, 6-b, 6-c トレンチ

中央の古墳の頂部に東西方向に幅1m、長さ7.8mのトレンチを設定した。腐葉土の直下で拳大の川原石が多く検出した。葺石と思われる。中央よりやや東よりで幅約2.3mの主体部を検出した。棺の幅は約1mで長さは確認できなかったが、主軸をほぼ南北方向に埋葬した木棺と思われる。主体部の東側で円筒埴輪が入った径20cmの柱穴を検出した。その南北の延長上に6-bトレンチ及び6-cトレンチを設定し、それぞれのトレンチで径20cmの柱穴を検出した。いずれも円筒埴輪は入っていないかったが、ほぼ60cm間隔に検出していることから、埴輪ピットと考えている。

主体部の西側で、径13cm、15cm、25cm、40cmの柱穴をそれぞれ検出した。遺物の出土がないため、古墳構築時の遺構か、付城築城時の遺構か不明である。墳丘頂部は付城築城時にはほとんど改変されていないものと思われる。

7 トレンチ

付城内の南東に幅1m、長さ13mのトレンチを設定した。トレンチ北端で墳丘裾を検出し、南端で外郭ラインの土壘の内側裾を検出した。幅約3.8m、深さ約0.2mの周溝と思われる溝を検出した。

8 トレンチ

付城内の北東に幅1m、長さ9mのトレンチを設定した。トレンチの南西端で墳丘裾を検出し、北東端で外郭ラインの土壘の内側裾を検出した。幅約4.4m、深さ約0.3mの周溝と思われる溝を検出した。土壘より南西へ約0.6mのところで柱穴を検出した。土層から、付城築城時に周溝の半分を埋めて約20cmの整地を施したことが観察できる。周溝を半分埋めず窪地として残した理由については、墳丘との比高差を高くする意図が考えられる。墳丘の頂部は付城時に何かの施設に利用されていたものと思われる。

遺物（第23図）は、腐葉土直下で石臼が出土した。上臼で、直径29.8cm、薄い部分が7cm、厚い部分が8.4cmである。花崗岩製で、上面は磨きにより光沢しており、白面は風化のために磨耗が激しく、溝の彫り込みが不明瞭である。

9 トレンチ

付城内の北西に幅1m、長さ15mのトレンチを設定した。トレンチの南東端の墳丘裾で幅約1.1m、深さ約0.2mの溝状の遺構を検出した。8トレンチで検出した溝状の窪地の続きと思われる。トレンチの北西端で外郭ラインの土壘の内側裾を検出した。墳丘裾から約10mのところで、約10cmの落ち込みを確認した。おそらく周溝の方と思われる。

遺物（第23図）は、落ち込みの上層で瀬戸美濃焼の天目茶碗が出土した。直径10.1cm、底径5.8cm、器高5.1cmである。口縁端部は外反し、茶色の釉を施し、体部の3分の2に黒釉を施す。高台はなく、胎土は密である。

10-a トレンチ

墳丘の西側に幅1m、長さ4mのトレンチを設定した。当初、付城内を仕切るために築いた土壘と考えていたが、墳丘の続きで、幅約8m、長さ約2mの造り出し状になることが判明した。造り出し状遺構の斜面の傾斜がかなり急であるため、さらに造り出し状遺構の裾より北西へ10mトレンチを延長した。裾より北西へ約7.5mのところで落ち込みを確認した。おそらく墳丘の残欠と思われる。落ち込みからさらに10cm落込んでおり、その土層が外郭ラインの土壘裾の下層に入り込んでいることから、周溝の可能性が考えられる。

10-b トレンチ

10-a トレンチで古墳の造り出し状の遺構であることが判明したので、南側の裾を確認するために設定した。造り出し状遺構の幅は約8mであることが確認できた。造り出し状遺構に続けて付城内の仕切りの土壙を築いていることが確認できた。実際、土壙を築いたのは約10mの長さということになる。

11-a トレンチ

付城より15m西側の墳丘状の裾部分に幅1m、長さ6mのトレンチを設定した。トレンチの北端で墳丘の裾と思われる遺構を検出した。さらに幅約3.6m、深さ約0.3mの周溝と思われる溝を検出した。遺物の出土はなかったが、表面観察と照らし合わせて、径約13mの古墳と思われる。

11-b トレンチ

付城西側の土壙部分の北側に幅1m、長さ5mのトレンチを設定した。土壙の裾と思われる遺構を検出した。

12-a トレンチ

外郭ラインの西部分の土壙外側に幅1m、長さ4mのトレンチを設定した。幅約2.4m、深さ約0.2mの堀を検出した。トレンチの南西端で、平成8年度のホースランドパーク建設に伴う調査で検出した高木19号墳の墳丘裾と思われる遺構を検出した。東側の周溝は、堀の構築によって消滅したものと思われる。

12-b トレンチ

付城西側の土壙部分の南側に幅1m、長さ4mのトレンチを設定した。トレンチの北端で土壙の裾と思われる遺構を検出した。11-b トレンチで検出した土壙の北側裾と照らし合わせて、上場幅約1.2m、基底部幅約4mの土壙であることが確認できた。さらに、幅約1.1m、深さ約0.2mの周溝と思われる溝を検出した。高木19号墳の周溝と思われる。

第3節 小 結

各トレンチで確認された遺構や地形測量による表面観察から、付城跡の概要を述べていきたい。

土 壈

外郭ラインの土壙の規模は、上場の幅1~1.2m、基底部幅4~5m、残存高1.2~1.6mである。付城の四隅に折れを設け、横矢掛けの手法を取り入れている。北東隅は古墳の墳丘を利用して土壙を構築している。付城内の仕切りの土壙は、規模が上場幅1~1.2m、基底部幅4m、残存高1.5mで古墳の造り出し状遺構を利用して、その続きに築いている。

堀

外郭ラインの土壙に沿って、幅1.7~2.4m、深さ0.2~0.3mの平面形が逆台形の箱堀と呼ばれる堀が巡っているものと思われる。付城の南西の虎口部分は途切れている。

虎 口

付城の外郭ラインの南西に幅1mの平入り虎口を設けている。柱穴などの遺構の検出はなく、簡単な構造の虎口であったと思われる。虎口部分では、幅0.5~0.8m、深さ0.2mの溝が、城内から虎口部分を東から西に横断して虎口西側の堀に繋がっているのを検出した。付城内の排水のために設けた溝と思われる。付城内を仕切る土壙の南側に幅1.6mの虎口を設けている。先述した外郭ラインの虎口から折れて、付城内に入る構造となっている。

多重土壙

二重の多重土壙線北側の続きを検出し、表面観察により付城の堀の傍まで続いているものと思われる。土壙の規模は、上場の幅1.5m、基底部幅3.7m、高さ0.5mである。

古 墳

付城跡の中央にある1号墳は、径20mで、幅8m、長さ2mの造り出しを備える古墳か、もしくは長さ10mの前方部で全長30mの前方後円墳の可能性が考えられる。後円部に主軸を南北方向にもつ幅2.3mの主体部を備え、幅1mの棺で棺材は見つかっていないが木棺であると思われる。主体部の東傍に円筒埴輪が立った状態で検出した

径20cmの埴輪ピットがある。延長上にはほぼ60cm間隔で径20cmの柱穴を検出しており、主体部の周りに据えた埴輪のピットと思われる。後円部の腐葉土直下や墳丘裾で多くの拳大の川原石が検出していることから、墳丘には葺石が施されていたものと思われる。付城築城時に後円部はほとんど改変されていないが、付城の何らかの施設に利用されたものと思われる。一方、前方後円墳と仮定すると付城内を塞ぐことになる前方部の墳丘をほとんど削って土壘の積土などに利用し、2mの長さの造り出し状に残し、それをを利用して付城内の仕切りの土壘を構築している。付城跡の南側に隣接する古墳の残欠は、径11mの古墳と推定されることから、高木40号墳とした。また、付城跡の西側の古墳は、径13mの古墳と推定されることから、高木39号墳とした。

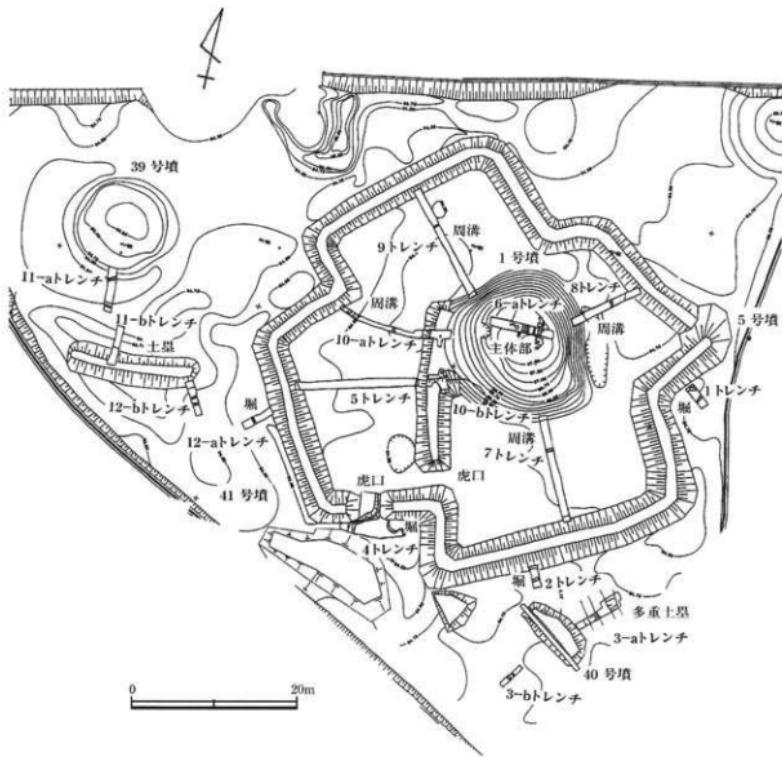
ま と め

高木大塚城跡は、横矢掛け手法を取り入れるために土壘の四隅に折れを設けて、平面形が十字形を呈した形状で築かれている。三木合戦時に織田方が築いた付城群の中でも特異な形状、縄張りであるため、各地の織田方が築いた付城の類例を調査し、検討していく必要がある。

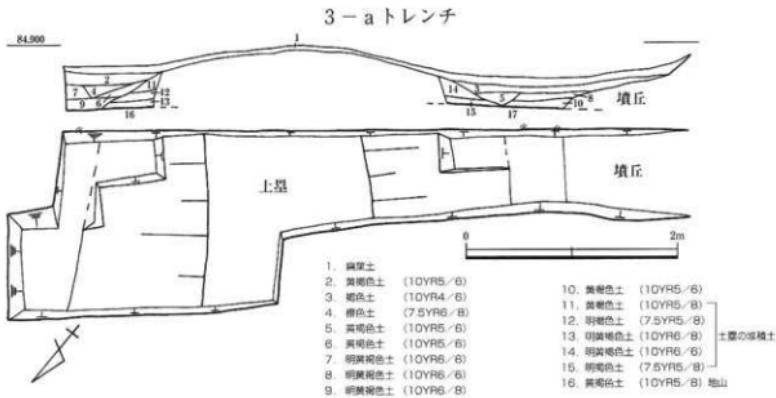
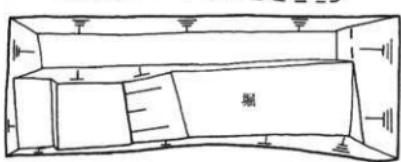
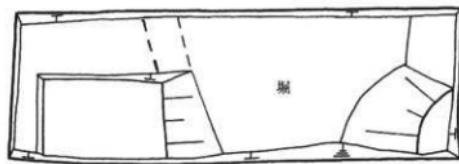
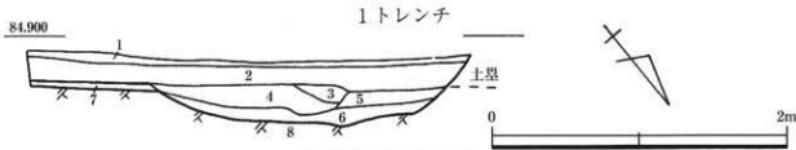
また、外郭ラインの土壘に沿って検出した堀が、シクノ谷峯構付城跡や明石道峯構付城跡などで検出した堀の深さに比べて非常に浅い堀である。築城に際して、必要最小限の仕事量に押さえるため、土壘の積土の利用に必要な分だけ掘った堀なのか、縄張り上深くする必要がなかったのか、今後の検討課題したい。

付城の内部から、1ヶ所ではあるが柱穴を検出し、何らかの建物や施設が存在していたことが想定され、瀬戸美濃焼の天目茶碗や石臼の遺物が出土していることから、築城されてから廃城まで當時生活に使用されていたことが想像される。

三木合戦の時に、三木城攻めの責任者である羽柴秀吉は、主君織田信長より茶会を開くことを許され、在陣する平井山本陣において初めて茶会を催している。出土した天目茶碗から、秀吉だけでなく、家臣も膠着する戦の合間に茶の湯を楽しんでいたことが想像できる。



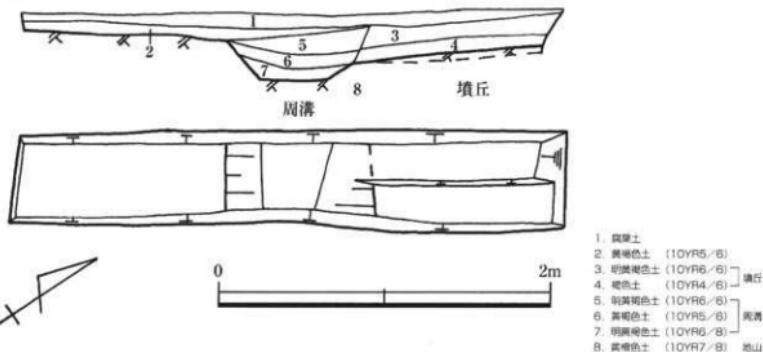
第15図 高木大塚城跡全体図



第16図 1・2・3-a トレンチ実測図

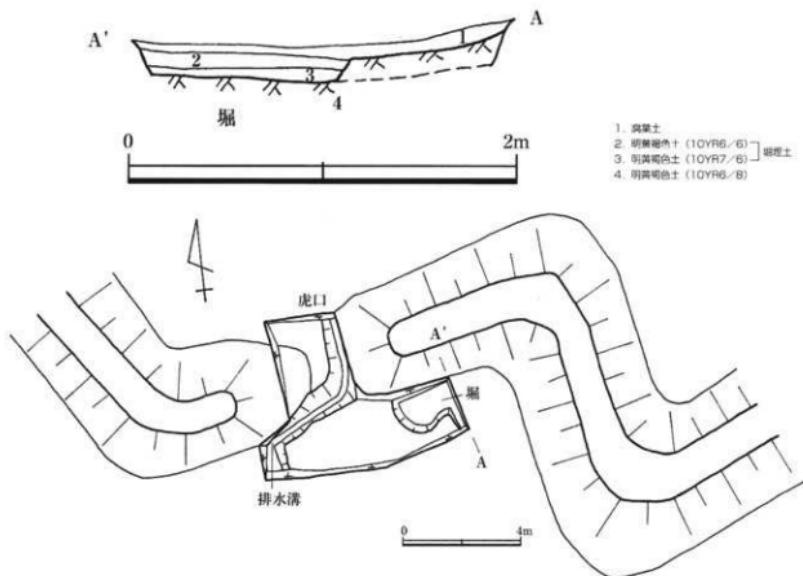
3-b トレンチ

84.800



4 トレンチ

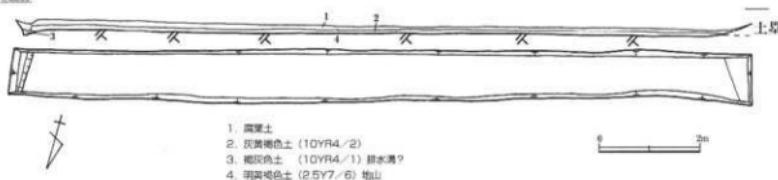
84.900



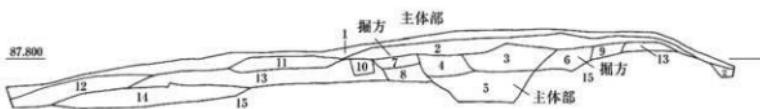
第17図 3-b・4 トレンチ実測図

5 トレンチ

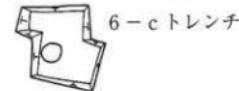
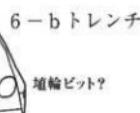
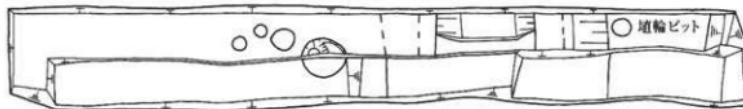
81.300



6 トレンチ



6-a トレンチ



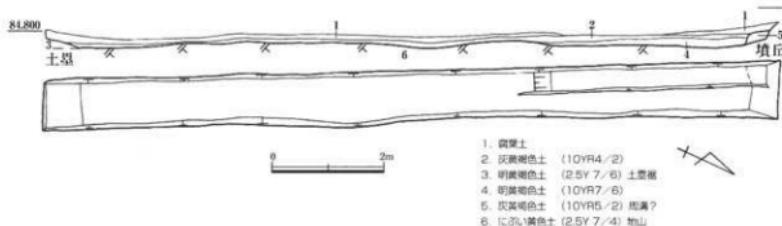
- 1. 腐葉土
- 2. 明黄褐色土 (2.5Y7/6)
- 3. 黄褐色土 (10YR5/6)
- 4. 明黄褐色土 (10YR6/6) 主体部 (木棺)
- 5. に次し黄褐色土 (10YR7/4)
- 6. 明黄褐色土 (10YR6/6) 主体部 掘方
- 7. 明黄褐色土 (10YR6/6) 主体部 掘方
- 8. 明黄褐色土 (10YR7/6) 主体部 掘方
- 9. 明黄褐色土 (10YR7/6) 塩輪ピット?
- 10. 明黄褐色土 (10YR7/6) 塩輪ピット?
- 11. 明黄褐色土 (10YR7/6)
- 12. 黄褐色土 (10YR8/6)
- 13. 明黄褐色土 (10YR7/6)
- 14. 明黄褐色土 (2.5Y7/6)
- 15. 明黄褐色土 (10YR6/6)

6-a トレンチ 塩輪ピット

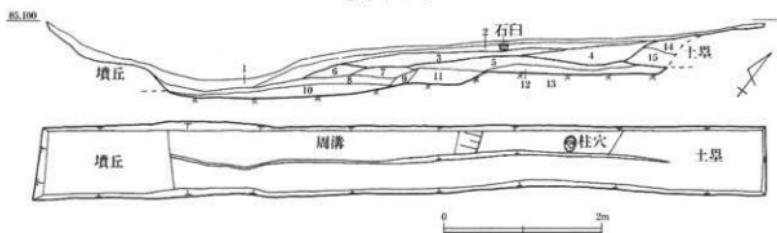


第18図 5・6 トレンチ実測図

7 トレンチ



8 トレンチ

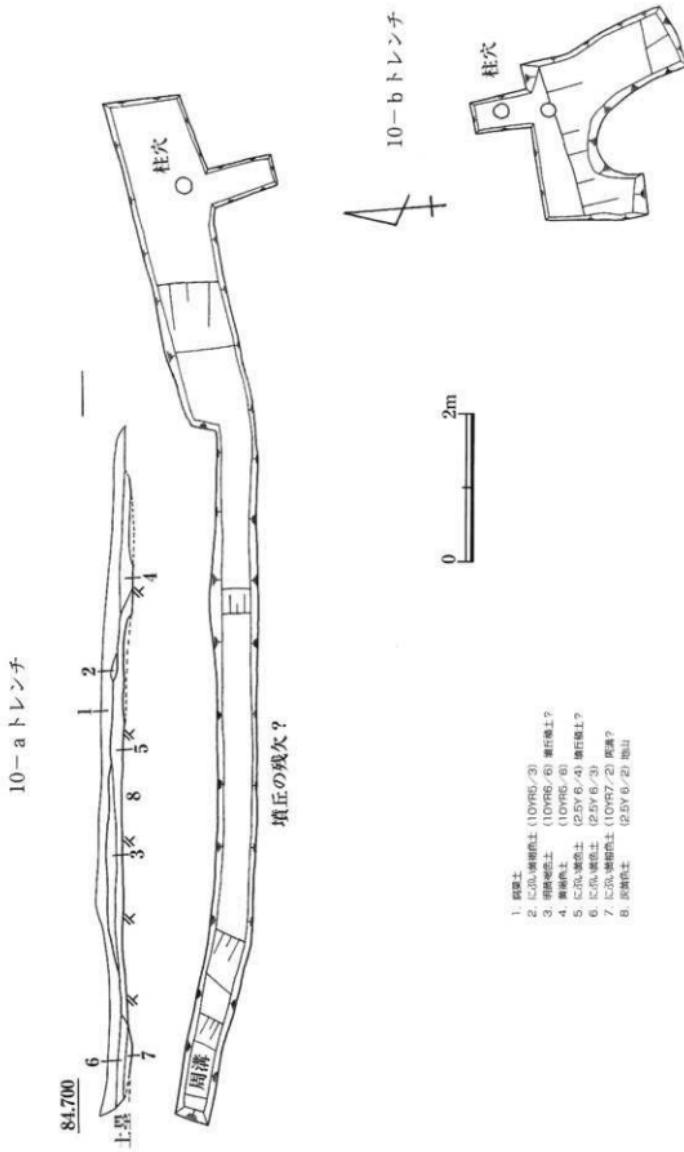


- | | |
|--------------------------------|---------------------------------|
| 1. 黄壤土 | 8. 明黄褐色土 (2.5Y 7/6) — |
| 2. 反黄褐色土 (10YR7/6) 小落大の部分多く混じる | 9. 明黄褐色土 (10YR6/6) — |
| 3. 明黄褐色土 (10YR6/6) | 10. 黄褐色土 (2.5Y4/1) 塗溝土? |
| 4. 棕色土 (7.5YR7.8) | 11. 黄褐色土 (10YR5.8) — |
| 5. 明黄褐色土 (2.5Y 7/6) 付城跡の構造面 | 12. 黄褐色土 (10YR7/8) |
| 6. 反黄褐色土 (10YR6/6) | 13. に(少)黄色土 (2.5Y 6/4) 古墳時代の遺構面 |
| 7. 明黄褐色土 (10YR7/6) | 14. 黄褐色土 (10YR6/6) — |
| | 15. 黄褐色土 (10YR7/6) 土壌の積土 |

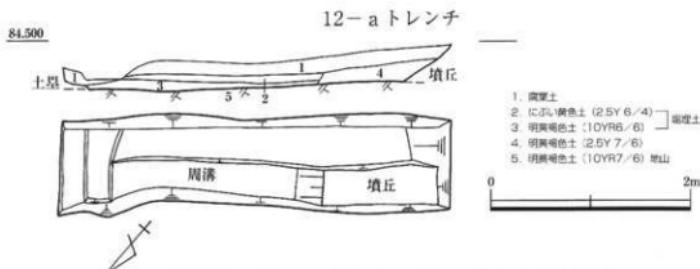
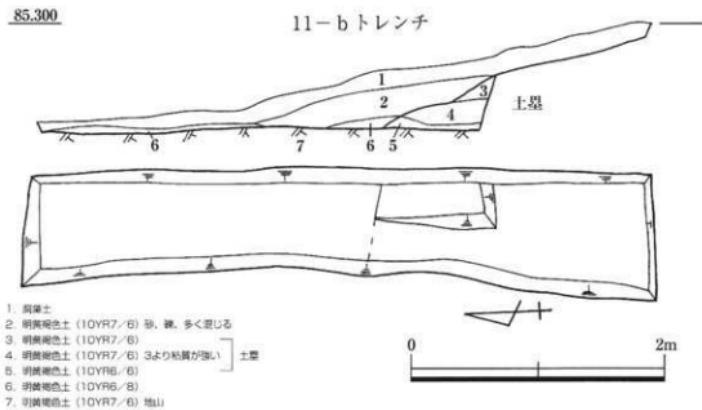
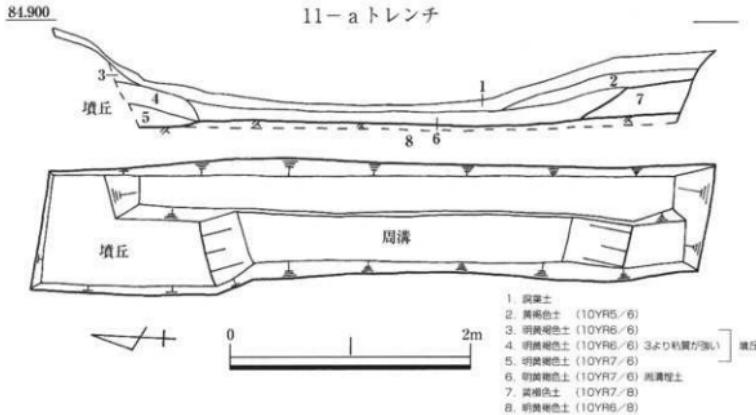
9 トレンチ



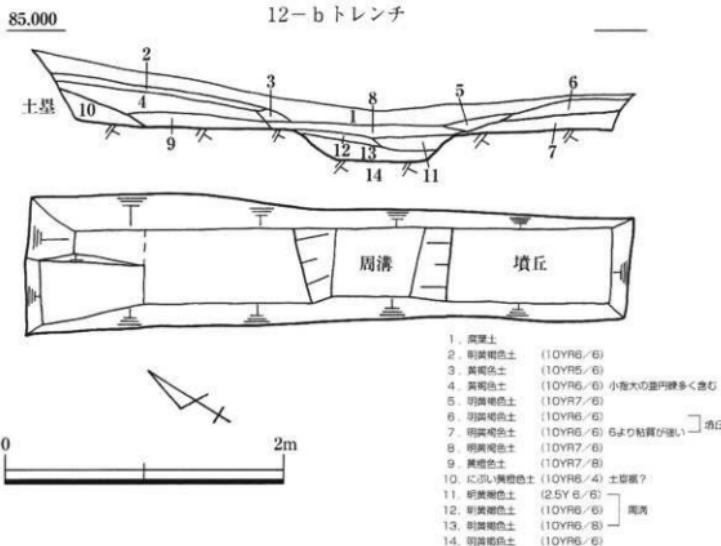
第19図 7・8・9トレンチ実測図



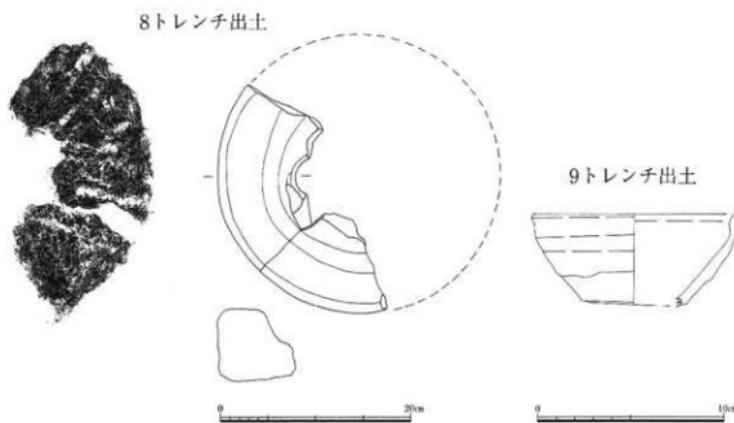
第20図 10-a・10-b トレンチ実測図



第21図 11-a・11-b・12-a トレンチ実測図



第22図 12-b トレンチ実測図



第23図 8・9 トレンチ出土遺物

第5章 三木城の南側に築かれた付城について

1. はじめに

シクノ谷峯構付城跡・高木大塚城跡が調査される以前に、平成4・5・9年度に小林八幡神社付城跡、平成11・12年度に明石道峯構付城跡が調査されており、三木城の南側に築かれた付城跡の構造が分かりつつあるので、今回の調査のまとめに変えて、これらの付城の特徴についてまとめてみたい。

2. 三木城南側の付城群の築城について

三木城南側の付城群は、三木合戦（天正6～8年・1578～80）のどの時期に築城されたのか、実際築城を行ったのは誰なのかを合戦の推移を見ながら検討してみる。

天正3年（1575）の長篠の戦いで武田氏を破った織田信長は、中国地方の毛利氏を攻める足掛かりとして播磨攻めを家臣の羽柴秀吉に命じ、天正5年（1577）10月より播磨攻めが始まる。当初、織田方と同盟していた別所氏は、秀吉とともに播磨攻めに参加していた。¹¹⁾天正6年の初め、秀吉は播磨西部の佐用郡を境界として、毛利氏・宇喜多氏と対峙していた状況の中で、別所氏が突然毛利氏に味方し、¹²⁾東播磨の在地領主も別所氏に追従した。

三木合戦の開戦は諸説あるが、実際の戦闘は、天正6年4月1日に織田方についた冷泉氏の居城である細川城を別所氏が攻撃したことに始まる。¹³⁾江戸時代の宝暦12年（1762）に著わされた『播磨鑑』の「三木城寄衆次第」には天正6年3月上旬の付城の配置場所と城主名が記載されているが、この時点では三木城はまだ包囲されていない。この後、7月の神吉城・志方城攻略まで秀吉は三木にはいない。7月15日に志方城を攻略した後に付城を数ヶ所構築している。¹⁴⁾宮田氏によると、この時に築かれたのは、平井山本陣（平井山ノ上付城）を中心とした三木城の北側丘陵の付城群である。ただし、秀吉の部隊が単独で築城したのではなく、5月より神吉城・志方城攻めに参加していた播磨攻めの総大将である信長の嫡男織田信忠の大軍が8月17日まで播磨に在陣していることから、¹⁵⁾これらの付城群の築城に関わっているものと思われる。これが第1次の築城時期と考えられる。¹⁶⁾

10月下旬、有岡城主の荒木村重が毛利氏・石山本願寺に寝返ったのに呼応するように10月22日に別所氏が平井山本陣を攻めてきたが、別所氏は大敗する。¹⁷⁾それでも、魚住からの毛利氏による兵糧搬入は絶えず行われた。この状況を打開すべく、天正7年（1579）の初春頃、兵糧搬入を阻止しようと秀吉の家臣古田重則等が戦いを挑んだが、失敗に終わった。¹⁸⁾この膠着状態を開拓するため、4月12日に信忠が大軍を率いて三木に出陣し、6城の付城

を築城することを命じている。⁶⁰これが第2次の築城時期と考えられる。この6城がいずれの付城か明記されていないので推測の域を越えないが、高木大塚城、シクノ谷峯構付城、明石道峯構付城、小林八幡神社付城の4城と平成15・16年度に兵庫県教育委員会によって調査された和田村四合谷村ノ口付城まで、等間隔で存在したと思われる2城が該当するものと考えている。この2城は住宅開発によりすでに消滅したものと思われる。高木大塚城、シクノ谷峯構付城、明石道峯構付城は先述した『播磨鑑』には記載されておらず、江戸時代の天保12年(1841)の『播州三木城地図』に多重土塁線とともに描かれている。

築城に携わったのは、4月8日に信忠より三木に先乗りした越前衆の不破光治、前田利家、佐々成政、原長頼、金森長近が考えられる。⁶¹越前衆は、天正6年の11月に荒木村重とともに寝返った茨木城主中川清秀、高槻城主高山右近を攻めるために付城を築いており、また三木で付城を築いた後、4月29日に淡河城を攻めるために付城を築いている。⁶²『信長公記』の天正6年11月14日付けの記録には、越前衆を「御普請衆」としていることから、この時期越前衆は付城築城など土木作業を専門に行っている部隊と考えられる。織田方は実戦部隊、築城部隊と軍の中で役割分担が行われていることが窺がえる。

3. 三木城南側の付城の特徴について

この第2次の築城時期に越前衆によって築城されたと考えられる高木大塚城・シクノ谷峯構付城・明石道峯構付城（三木市指定文化財）・小林八幡神社付城の4城のうち、高木大塚城は、三木合戦の付城群のなかでも特異な形状と構造をしていることが表面観察や確認調査で明らかのことから、織田方の付城の類例より比較検討を別の機会に委ねたい。

高木大塚城以外の3城の特徴について比較検討を行っていきたい。

まず、小林八幡神社付城跡の特徴について述べる。小林八幡神社付城は三木城の南側で、直線距離で約2.3kmのところに位置する。シクノ谷峯構付城の東側にある宿ノ谷より東方向に続く開析谷の八幡谷に突き出した尾根の先端に立地している。付城の南側には八幡谷より派生した谷があり、北・西・南の三方向が谷によって囲まれ、天然の堀となっている。付城跡から三木城を望むことはできないが、丘陵南側の眺望は開けている。構造は、尾根の先端に低い土塁で囲まれた面積が約180m²と狭い西郭と堅固な土塁で四方を囲まれ、郭の北東と南西に横矢掛かりの手法を取り入れ、北西隅に約20m²の櫓台と考えられる施設を設けた面積約3,300m²の主郭、鎧状の土塁で囲まれた面積約1,200m²の東郭からなる。主郭の西側には幅約2mの虎口を備えて

いる。東側の虎口は神社による改変で明確ではないが、表面観察により東側の土壘の先端部分が虎口であった可能性が高い。このように想定すれば、主郭の虎口は東西の直線上に配置されていることになる。

市道建設に伴って主郭の西側約600m²の面積の調査では、南西の虎口方向に緩やかな傾斜をつけて整地している。中央から北側土壘にかけてさらに盛土を施し、基壇状の高まりを形成している。その法面には地固めと考えられる拳大の川原石が敷ききつめられている。付城内の遺構としては、70cm四方の方形土坑が3ヶ所と径70cmの円形の集石遺構がある。柱穴や礎石の検出がなく、調査範囲内での建物跡の存在は明確ではない。遺物は、丹波焼擂鉢、古銭、鉄釘、鉄砲玉とわずかではあるが出土した。

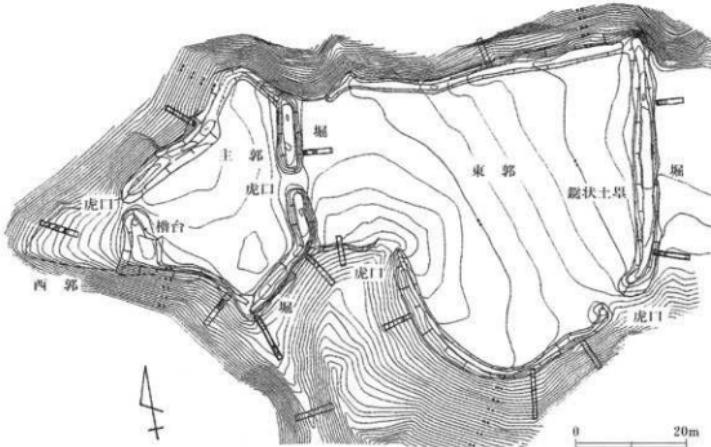


第24図 小林八幡神社付城跡全体図

次に明石道峯構付城跡の特徴について述べる。明石道峯構付城は、三木城の南側で、直線距離で約2kmのところに位置する。付城西側のある開析谷の宿ノ谷が東に方向を変える八幡谷との変換部分に突き出した尾根の先端に立地する。付城の北側には宿ノ谷より派生した谷があり、北・西・南の三方向

が谷で囲まれ、天然の堀となっている。付城跡から三木城を望むことはできない。また、南側の眺望はほとんど望むことができない。しかし、西側のシクノ谷峯構付城跡が見渡せ、八幡谷に沿って東側の眺望がわずかに望むことができる。構造は、尾根の先端に土壘に囲まれない面積が約160m²と狭い西郭と堅固な土壘で囲まれた面積が約1,100m²の主郭、低い土壘に囲まれた約3,300m²と広大な面積をもつ東郭とからなる。主郭には、南西隅に約20m²の櫓台と考えられる施設を設けて、西側には幅約1m、東側には幅約2mの虎口を直線上に設けている。主郭の東側土壘の高さが2mを超える、三木合戦の付城の中で最も高い。東郭の東側土壘も北及び南側の土壘に比べて堅固に築いており、表面観察では鎧状を呈している。南側土壘の東西に、南に開口する虎口を設けている。

調査では、主郭の南東側の土壘に沿って、幅約2.3m、深さ約0.5mで断面形がV字形の堀を検出し、東側の土壘に沿って、幅約2.5m、深さ約0.5mで断面形が逆台形の堀を検出した。また、東郭の東側土壘に沿って、幅約1.6m深さ約0.3mで断面形が逆台形の堀を検出した。付城内の調査は実施できなかったので、建物跡などの内部施設については分からぬ。調査面積が狭小であるため、遺物の出土はなかった。付城は特に尾根伝いの攻撃を遮断するため、各郭の東側の土壘を堅固に築き、堀を併設して、防御を強固にしている。



第25図 明石道峯構付城跡全体図

これまで、小林八幡神社付城跡、明石道峯構付城跡について述べてきたが、シクノ谷峯構付城跡を含めてこの3城に共通する特徴をまとめてみたい。

- ①立地 大きな開析谷に面し、その谷に突き出した尾根の先端に立地している。三方向を谷で囲まれている。
- ②眺望 いずれの付城跡からも三木城を望むことができない上に、眺望も良くない。
- ③構造 堅固な土塁で囲まれた主郭と、先端部分には低い土塁、または土塁を築いていない面積の狭小な郭を配置し、尾根の付け根の方には鎌状の土塁で囲まれた郭を配置している。主郭には約20m²の櫓台と考えられる施設を設けている。主郭の東西に虎口を一直線上に設けている。

以上の共通点が指摘できる。

これらの共通点は、同一武将による築城を意味するのか、その武将は、先述した5人のうち誰なのか、もしくは織田方に存在する何通りかの付城の縄張りのうちの一つなのか今後の検討課題としたい。

註

- (1) 祖父の村治以来、織田氏と別所氏は同盟関係にある。長治の“長”は信長の“長”を賜った偏諱と思われる。
- (2)『別所記』によると天正6年2月23日に長治の叔父吉親（賀相）と家臣の三宅治忠が加古川城における秀吉との軍議で決裂したことが、三木合戦の原因と考えられてきたが、『兵庫県史』史料編中世9に所収されている天正6年3月19日付けの吉川元春に宛てた足利義昭御内書のなかに「今度三木以下引付味方之間」と見え、当時、毛利氏の食客となっていた前將軍足利義昭の調略が想像される。
- (3)『別所長治記』
- (4)『信長公記』
- (5)宮田逸民「織田政権と三木城包囲網—秀吉による「三木の干殺し」の検証—」『歴史と神戸』169号 平成3年12月
- (6)『信長公記』
- (7)『伯老志』
- (8)『豊鑑』一
- (9)『信長公記』
- (10)『信長公記』
- (11)『信長公記』

写 真 図 版



シクノ谷峯構付城跡遠景



高木大塚城跡全景

図版2 シクノ谷峯構付城跡



1 トレンチ 土塁内側（北西より）



1 トレンチ 土塁外側（北東より）



2-a トレンチ 堀（北西より）

図版3 シクノ谷峯構付城跡



2-a トレンチ 土壌 出土状況

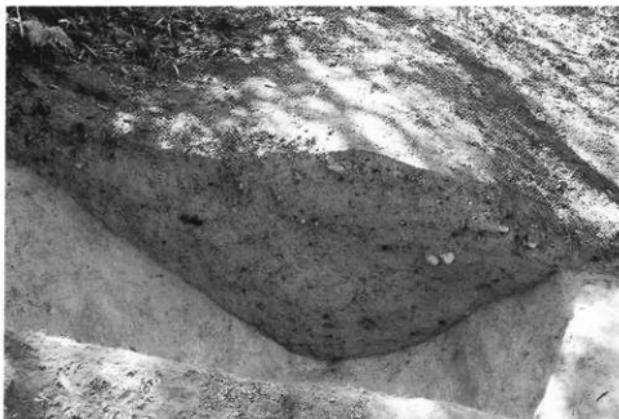


2-b トレンチ（北より）



3-a トレンチ（北東より）

図版4 シクノ谷峯構付城跡



3-a トレンチ 堀（東より）



3-a トレンチ 帯郭（東より）



4 トレンチ（北より）

図版5 シクノ谷峯構付城跡



5 トレンチ 全景（北西より）



5 トレンチ 西断面（東より）



5 トレンチ 西側柱穴（西より）

図版6 シクノ谷峯構付城跡



5 トレンチ 東側柱穴（東より）



6 トレンチ 全景（北東より）



6 トレンチ 帯郭（北東より）

図版7 シクノ谷峯構付城跡



6・7 トレンチ（南東より）



7 トレンチ（北東より）



8 トレンチ（北西より）

図版8 シクノ谷峯構付城跡



9 トレンチ（北東より）



10 トレンチ（北より）



11 トレンチ（南西より）

図版9 高木大塚城跡



1 トレンチ（北東より）



2 トレンチ 全景（東より）



2 トレンチ（南東より）

図版10 高木大塚城跡



3-a トレンチ 多重土堀
北東側土堀（北より）



3-a トレンチ 多重土堀
南西側土堀（西より）

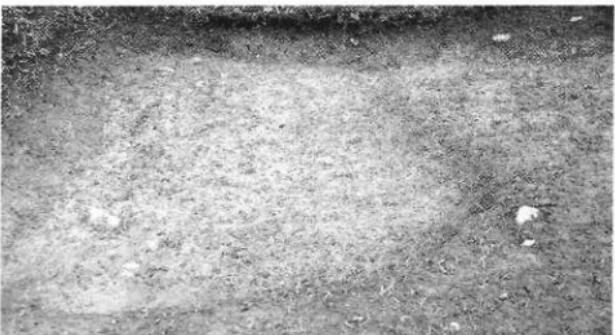


3-b トレンチ（南東より）

図版11 高木大塚城跡



4 トレンチ（南西より）

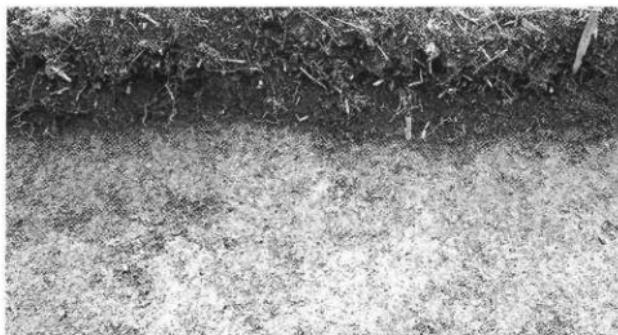


4 トレンチ 挖（西より）



5 トレンチ（東より）

図版12 高木大塚城跡



5 トレンチ（南より）



6 トレンチ（西より）



6-a・b・c トレンチ（南西より）

図版13 高木大塚城跡



6-a トレンチ 主体部？（南より）



6-a トレンチ 円筒埴輪 出土状況



7 トレンチ（東より）

図版14 高木大塚城跡



8 トレンチ 周溝？（南東より）



8 トレンチ 柱穴検出状況（南東より）



8 トレンチ 土墨掘（南東より）

図版15 高木大塚城跡



8 トレンチ 石臼出土状況



9 トレンチ 全景（南東より）



9 トレンチ 周溝？（南西より）

図版16 高木大塚城跡





10-a トレンチ 墳丘部分（東より）



10-a トレンチ 墳丘部？（北より）



10-b トレンチ 全景（北より）

図版18 高木大塚城跡



10-b トレンチ
壇丘・土塁連絡部(北より)



11-a トレンチ (西より)

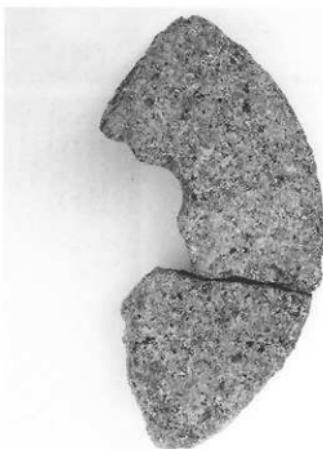


11-b トレンチ (北西より)

図版20



シクノ谷峯構付城跡2-a トレンチ堀出土遺物（挿図 第13図）



高木大塚城跡8 トレンチ出土遺物（挿図 第23図）



高木大塚城跡9 トレンチ出土遺物（挿図 第23図）

図版19 高木大塚城跡



12-a トレンチ（北東より）



12-b トレンチ（西より）

報告書抄録

ふりがな	しくのたにみねがまえつけじろあと・たかぎおおつかじょうあと
書名	シクノ谷峯構付城跡・高木大塚城跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	三木市文化研究資料
シリーズ番号	第19集
編著者名	小網 豊
編集機関	兵庫県三木市教育委員会
所在地	〒673-0492 兵庫県三木市上の丸町10番30号 TEL794-82-2000
発行年月日	平成19年（西暦2007年）3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
シクノ谷峯構付城跡	兵庫県							重要遺跡
	三木市			34度	134度	2001.7.17		範囲内用
	福井	28215	160333	46分	58分	~		確認調査
	字三木山			50秒	41秒	2002.3.20		
	国有林							
高木大塚城跡	兵庫県							重要遺跡
	三木市			34度	134度	2002.9.20		範囲内用
	別所町	28215	160284	47分	58分	~		確認調査
	高木			16秒	17秒	2003.3.28		
	字大山							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
シクノ谷峯構付城跡	城館（付城）	戦国時代	土壙・堀・櫓台 柱穴	土壙	
高木大塚城跡	古墳 城館（付城）	古墳時代 戦国時代	円墳 主体部・周溝 土壙・堀・柱穴	円筒埴輪 石臼	1号墳は前方後 円墳の可能性あり 天目茶碗

三本市文化研究資料第19集
シクノ谷峯構付城跡・高木大塚城跡

平成19年3月

編集・発行 三本市教育委員会
兵庫県三本市上の丸町10番30号
TEL 0794-82-2000㈹

印 刷 キング印刷商事(株)
兵庫県加西市北条町栗田346
TEL 0790-43-8280